

THE
JAPAN FOUNDATION
2010/2011

國際交流基金 2010年度 年報

国際交流基金

ジャパンファウンデーションとは

世界の全地域において、総合的に国際文化交流事業を実施する組織として、1972年10月に特殊法人として設立され、2003年10月に外務省所管の独立行政法人となりました。現在、本部と京都支部、ふたつの附属機関(日本語国際センター、関西国際センター)、および海外21カ国に開設された22の海外拠点を中心に、外部団体と連携しつつ、文化芸術交流、海外における日本語教育、日本研究・知的交流を3本の柱として活動しています。政府出資金(780億円)を財政的基盤とし、この出資金の運用益、政府からの運営費交付金および民間からの寄附金などにより運営しています。役職員数は230名(2011年3月現在)です。

沿革

1972年	国際交流基金(The Japan Foundation)設立
1989年	日本語国際センター(埼玉県)設置
1991年	日米センター(Center for Global Partnership)設置
1997年	関西国際センター(大阪府)設置
2003年	独立行政法人国際交流基金となる
2006年	日中交流センター設置

国際交流基金の設立の目的は2002年(平成14年)に定められた以下の法律に則ったものです。

独立行政法人国際交流基金法 第3条

「独立行政法人国際交流基金は、国際文化交流事業を総合的かつ効率的に行うことにより、我が国に対する諸外国の理解を深め、国際相互理解を増進し、及び文化その他の分野において世界に貢献し、もって良好な国際環境の整備並びに我が国の調和ある対外関係の維持及び発展に寄与することを目的とする」

国際交流基金の活動の3本の柱

文化芸術交流

芸術や暮らしのなかで生まれた日本の価値観と世界の価値観が触れ合う機会をつくりだす

言語の違いを超えた感動は、日本への興味と共感を生み、理解を促す源泉となります。国際交流基金は、そのような源泉を生み出す場の提供をめざし、美術、音楽、演劇、文学、映画などの芸術から、食、ファッション等の生活文化にいたるまで、日本の文化芸術を紹介し、文化芸術分野のグローバルな交流をプロデュースし、各分野のネットワークづくりを支援しています。

海外における日本語教育

日本語を理解する人を増やすこと

それは世界に日本の理解者を増やしていくこと

海外の人たちに日本語を知ってもらうことは、日本への親しみや理解を世界に広げていくことにつながります。国際交流基金は日本語教育が世界で活発に行われるよう、全世界規模での日本語能力試験(JLPT)の実施や教材開発、海外日本語講座の展開、日本語教育の専門家の海外への派遣、海外で教える教師の国内研修など、さまざまな側面から日本語教育を支援しています。

日本研究・知的交流

日本への深い理解と世界の「知」への関心

ふたつが交錯するところに

世界共通の課題を解く鍵がある

海外での日本研究を支援すること、遠い国の社会や文化への理解を日本のなかで広げていくことは、相互理解を深め、心をひとつにして共通の課題の解決に向かっていくことにつながります。国際交流基金は深い日本理解と人的ネットワークの形成を促進するため、海外の日本研究者を支援し、また国際的に著名な学者を日本に招くなど、学術や研究を通じて国際交流を積極的に推し進めています。

理事長からのごあいさつ



このたび、2011年10月1日をもって国際交流基金理事長として就任いたしました。国際交流基金(ジャパンファンデーション)は1972年の設立以来、40年にわたって我が国の国際文化交流を担う枢要な機関としての歩みを重ねてまいりました。この歴史と伝統ある法人の理事長に任命され、身の引きしまる思いがしております。

私自身、国際交流基金とほぼ同じだけの長さの歴史を外交官として歩んでまいりました。40年前、外交官になりたてのころ、勤務先のワシントンでまだ産声を上げていない国際交流基金の設立準備を手伝ったことが、いまでも鮮やかに記憶に残っております。その後、さまざまな地域・分野で外交活動を行ってまいりましたが、

文化と国際交流はいつも私の重要な関心事でありましたし、英国ジャパン・フェスティバル(1991年)など、大規模文化事業にも直接関わりました。その間一貫して、私自身が国際交流基金の応援団であったと自負しております。

このたびの理事長就任にあたっては、初めての公募という形で、透明性の高いプロセスにより選んでいただきました。皆様の高いご期待・ご関心に責任を持って応えるべく、気持ちを新たにしております。

現在、日本の内外において大きな変化が起こっています。日本の財政状況が非常に厳しくなっているなか、またこの度の東日本大震災からの復興が急務とされるなか、国際文化交流事業の意味が改めて問い直されております。文化とその交流が生み出す力、それを日本の「元気」として発信する力が必要とされています。また海外においては、さまざまな国際情勢の変化のなかで、日本という国の立ち位置が変わり、外交や国際文化交流の担い手はますます多様化し、交流そのもののありようが大きく変化してきました。こうした内外の変化を踏まえ、国際交流基金が将来にわたってどのような役割を果たし、どのような活動を展開すべきかを考え直す時期にきていると思います。

このような、いわば地球的な多文化共生の時代を生きる国際交流基金の理事長として、広く皆様のご意見を伺い、自らも積極的に考えるところを述べ、真摯に議論し、国際文化交流のさらなる発展に尽くしたいと考えております。そのために、守りではなく攻めの姿勢を大切にしたい。“Japan” Foundationでありますから、日本全体のこと、そして日本が位置する世界のことを考えて、世界中の皆様と一緒に歩んでいきたいと思っております。

2011年10月1日

国際交流基金
理事長 安藤 裕康

00 2010年度 国際交流基金主要事業カレンダー

02 理事長からのごあいさつ

04 国際交流基金2010年度を振り返る

06 東日本大震災:世界から届いたメッセージ

08 国際交流基金賞/地球市民賞

09 文化芸術交流

10 文化芸術交流事業の紹介

12 2010年度 主な事業

17 海外における日本語教育

18 海外における日本語教育事業の紹介

20 2010年度 主な事業

25 日本研究・知的交流

26 日本研究・知的交流事業の紹介

28 2010年度 主な事業

32 情報提供/国内連携

34 国・地域別の取り組みと海外拠点の活動

41 資料

42 文化芸術交流事業概観

44 海外における日本語教育事業概観

46 日本研究・知的交流事業概観

48 民間からの資金協力

50 財務諸表

53 諮問委員会等

54 国際交流基金の海外拠点

56 国内連絡先一覧/組織図

57 国際交流基金のウェブサイト

国際交流基金 2010年度を 振り返る

国際交流基金は2010年度も、日本の芸術、舞台、出版や映像、生活文化を海外で紹介し、日本語を通して日本に親しみを感ずってもらうための事業や、知的交流や日本を研究する専門家同士の交流など、多くの事業を展開しました。ここでは、それらの事業の一端を写真で紹介します。



日本語教育を支援する→P.20

世界各地に日本語教育の専門家を送り、現地の教育をサポートしています。インドネシアでは中等教育課程で日本語授業が取り入れられており、日本語を学ぶ人が増えています[インドネシア・バリ島]



日本の美術を世界へ

国単位での参加が求められる国際美術展で日本を代表する美術家を紹介しています。2010年度、第14回バングラディッシュビエンナーレでは名和晃平氏の展示がグランプリを受賞[バングラディッシュ・ダッカ] 撮影：表 恒匡



日本館展示をオーガナイズ

第12回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展では、日本館コミッショナーの北山恒氏のもと、塚本由晴氏と西沢立衛氏が作品を展示。日本の建築界の現在を世界に伝えました 撮影：Andrea Sarti/CAST1466



楽しく日本語に触れる機会を

国際交流基金の海外拠点では、市民が気軽に日本文化に触れられるイベントを開催しています。写真はトロント日本文化センターがマントバで行った日本語体験事業で書道に触れた参加者たち[カナダ・マントバ]



日本独自の舞台芸術を紹介

日本独自のダンススタイル「舞踏」。世界の現代舞踊界に衝撃を与えた舞踏の世界を、2010年度「大駱駝艦天賦典典 ブラジル公演」で、南米の若い世代に伝えました[ブラジル・サンパウロ]



世界の知の交流を活性化

世界に共通する課題を議論する場をつくっています。今年度は国際シンポジウム「ソーシャルファームを中心とした日本と欧州の連携」を東京で開催しました



日本の小説に親しむ→P.36

日本の文学や小説に海外の人が興味をもてるよう活動を展開しています。『世界の中心で、愛をさけぶ』の著者、片山恭一氏が韓国・中国での初の海外講演を行い、サイン会も大盛況でした[中国・北京]



文化を通じて平和へ貢献

国の政治状況等により過酷な体験をし、傷ついた子ども達の世界にはいます。日本でさまざまな知見をもつ専門家を海外に派遣し、子ども達をサポートする「第2回アチェの子供たちと創る演劇ワークショップ」の活動を行っています[インドネシア・アチェ]



日本のロボットは人気者→P.15

「ロボット」は日本の技術力の証であるとともに、日本の文化を物語る存在。生活文化交流の一環として、今年度は産業総合研究所が開発し、福祉の分野で活躍する「あざらし型セラピーロボット パロ」を、ベトナム、シンガポール、ブルネイ、パキスタンで紹介しました。ロボットが人の心を癒す存在となることなど、開発の背景となる考え方とともに、パロの動きが多くの人の心を捉えました[ベトナム・ハノイ]



音を通して分かち合う

「AGA-SHIO + ミュージック&リズムス アフリカ巡回公演」は三味線とピアノの異色デュオと和太鼓と竹楽器の奏者達が織りなすライブ。コンゴ、南アフリカの2カ国で開催し、現地の若者と交流するワークショップも行いました[コンゴ民主共和国・キンシャサ] 撮影：Satoru Shionoya



近隣諸国と互いの文化を語り合う

長い歴史のなかで互いに影響しあい、発展してきた日中韓の3カ国。政治経済のつながりだけでなく、文化という視点から自国と近隣国を見つめ合う機会が「第6回日中韓文化交流フォーラム」です。今年度は、奈良薬師寺(慈恩殿)で本会議が行われました

参加体験型のイベントでより身近に

日本の伝統芸能を伝える公演も積極的に行っています。「日本舞踊 西川箕乃助 シンガポール・マレーシア公演」では来場者も参加できるワークショップも行われました[マレーシア・クアラルンプール] 撮影：Garry Loke Hon Weng



東日本大震災： 世界から届いた メッセージ

米国



国際交流基金が過去に支援をしたフェローや、招へいた研究者など、さまざまな方が応援メッセージを届けてくれました。米国の子どもたちが描いてくれた「元気メッセージ」は、来日したジャーナリストたちを通じて被災地の小学校へ届けられました。撮影：相川健一

スペイン



スペイン東部のカタルーニャ州バルセロナで毎年開催される Mon Libre (モン・リブラ：本の世界) は児童文学のフェスティバル。2010年4月23日に開催されたこの年のお祭りは、直前に起きた震災をうけて、「日本復興祈念のイベント」と位置づけられました。このイベントで、国際交流基金は世界で活躍する日本の絵本作家、五味太郎氏のワークショップを共催しました。床に敷き詰められた25メートルもの長さの紙に子供たちが、たくさん色で、筆や手の平をつかって自由に絵を描き、日本への想いを書いてくれました。写真提供：ブロンズ社、Coco books

中国



中国の若者に日本の文化に親しんでもらう目的で中国各地に開設されている「ふれあいの場」。四川省の「成都ふれあいの場」に集まった23人の学生たちは2008年に四川での大震災を経験した若者です。“頑張れ”の気持ちこもった寄せ書きとビデオメッセージが届けられました。ビデオメッセージは以下のURLでご覧になれます。
<http://www.chinacenter.jp/japanese/shinsai/shinsai.php>

ウズベキスタン



国際交流基金の事業で来日し、日本への強い想いを抱いていた専門家のなかには、震災後すぐに被災地へ向かい、ボランティアグループを組織、週末ごとに炊き出しを行ったり、瓦礫の撤去に加わった人もいました。タシュケント国立東洋学大学政治学研究所のトゥイチェフ・ムヒディン氏(右)は日本在住のイスラム社会の人たちとともに、震災直後から被災地入りしました。

オーストラリア



世界各地で、たくさんの方が日本のために、アクションを起こしてくれました。オーストラリアのシドニー日本文化センターのスタッフは「Australia Supports Japan」を掲げ、ボランティアで週末のチャリティ・イベントを行い、ウェブサイト上に支援情報の交換の場をつくりました。そこには、多くのオーストラリアの市民から支援が寄せられました。

2011年3月11日、東日本で起きた未曾有の災害。その惨状はテレビ、新聞、インターネットにのって瞬く間に世界へと伝えられました。国際交流基金の海外拠点や、東京の本部には、東日本大震災が起きて以来、多くの国から哀悼と激励のメッセージが届けられ、また、さまざまな支援の手が差し伸べられました。この機会を通じて、私たち国際交流基金も、あらためて、私たちが地球市民であること、パートナーシップにより世界と連帯することの重要性を認識することになりました。

そして、海外の一般の方だけでなく、これまで国際交流基金のさまざまな事業を通じて、密な関係を築いてきた専

門家や、団体の皆さんからも、温かいメッセージが寄せられ、チャリティイベントや募金、メディアでの意見表明など、たくさんのアクションの情報も届いています。そのアクションの輪は世界の全地域に広がっており、日本の多くの人びとが勇気づけられました。

これらの出来事からも、日本と海外の国々にとの連携の重要性がますます高まっているを感じます。国際交流基金はこれまでに培ってきた国際的な人的ネットワークや災害復興・防災等に関する事業の実績とノウハウを活かし、積極的に事業を実施し、文化交流を通じた国際間の連携強化と、震災復興に引き続き貢献していきます。



ドイツ

ベルリン日独センターでは「東日本大地震と新旧メディアの役割～日独における地震報道に関する比較の視座」と題したシンポジウムが行われました。震災でテレビや電話、そして携帯電話やインターネットなどの新旧メディアが果たした役割と、日独での報道の差から、情報の送り手と受け手のなかにある課題が議論されました。



ベトナム

ベトナム国家大学ハノイ人文科学大学の教職員と学生500名が、震災の犠牲者を悼み、復興を応援する会を開きました。黙祷、学生が編集した震災VTR上映、日本学科の学生の日本の地理や文化、千羽鶴の由来の紹介があり、主催者と参加者全員が折ってくれた折り鶴一万羽が同校と交流のある福島大学に贈られました。



エジプト

カイロ日本文化センターのスタッフは、カイロのタハリール広場で、日本語を学ぶ人々からのメッセージをビデオで撮影。多くの方に見ていただけるよう映像をYoutubeに投稿しました。日本語を学ぶ人の日本語によるメッセージに加え、撮影中、道行く人たちが次々と飛び入りで参加し、励ましの言葉を伝えてくれました。



米国

米国ミズーリ州ウェブスター大学では、日本人学生会が「Hope For Japan」という支援イベントを立ち上げました。義援金を集めるためのフリーマーケットや和太鼓公演などのチャリティ・イベントのほか、震災について考えるシンポジウムなど、多角的なイベントが行われました。



トルコ

トルコの首都アンカラにある土日基金文化センター内の日本語講座受講生が、学んだばかりの日本語を使って、寄せ書きを送ってくれました。

国際交流基金の東日本大震災に関連した事業への取り組みの方針

1. 日本社会や日本人についての理解を深める事業

震災後に高まった日本に対する国際的な関心・連帯意識をより深い日本理解へつなげていきます。また、日本への関心が、ステレオタイプの日本特殊論や日本人論に走ることを避けるため、日本の文化を多様な側面から紹介します。

2. 震災後の日本社会の復興、再生、活力回復に資する事業

被災地域の文化（芸術、芸能、人びとの考え方、行動等）を海外に紹介するなど、被災地で行われる国際文化交流事業を支援し、被災地をはじめとする日本の地域社会が国際社会との繋がりのなかで復興への活力や希望を取り戻す機会を提供します。

3. 日本の被災経験・教訓を国際社会に活かす事業

震災や復興に至る道筋についての研究や知的な対話、そして震災と復興の体験を世界の人びとと共有することより、防災教育や防災文化の普及を世界に促し、国際社会に貢献します。

4. 海外拠点による各国での日本支援・犠牲者追悼イベントへの協力

海外で開催されるチャリティイベントや日本支援への取り組みに、各地域にあるネットワークを活かし、ノウハウや場の提供等で協力します。

国際交流基金賞

国際交流基金では、1973年以来毎年、学術、芸術、その他の文化活動を通じて、国際相互理解の増進や国際友好親善の促進に特に顕著な貢献があり、引き続き活躍が期待される個人、団体に「国際交流基金賞」を授賞し、国際文化交流の発展を奨励しています。

2008年度より国際交流基金賞と国際交流奨励賞を統合し、「文化芸術交流部門」「日本語部門」「日本研究・知的交流部門」の3部門で国際交流基金賞を授賞しています。

2010年度 受賞者



文化芸術交流部門

佐藤忠男

日本

映画評論家

日本を代表する映画評論家であり、アジア映画研究の先駆者として、映画分野における国際交流に積極的に取り組み、特に従来、紹介されることの少なかったアジア諸国の優れた作品に光を当て、世界の観客の関心を高める上で大きく貢献している。

受賞記念講演会「映画で世界を愛せるか」
2010年11月2日、国際文化会館にて



日本語部門

サヴィトリ・
ヴィシュワナタン

Savitri Vishwanathan

インド

デリー大学前教授

デリー大学において、日本語・日本史・日本政治の研究・講義を長年担当し、インドにおける日本研究、およびその基礎となる日本語教育をインドで根付かせ、後進の育成に大きく貢献した。

受賞記念講演会「インドー日本：変化する認識」
2010年10月29日、国際文化会館にて



日本研究・知的交流部門

ベン＝
アミ・シロニー

Ben-Ami Shillony

イスラエル

ヘブライ大学名誉教授

イスラエルにおける日本研究の第一人者として、日本の歴史研究において優れた業績を挙げるとともに、欧米を中心に世界各地において、日本文化の理解促進と学術交流、そして日本研究の推進に大きく貢献している。

受賞記念講演会「日本と私～日本研究の展望」

2010年10月28日、国際文化会館にて。財団法人国際文化会館との共催

地球市民賞

2010年度 受賞者

地球市民賞は、地域・コミュニティに根ざし、かつ先導的なモデルとなる国際文化交流活動を行っている団体を顕彰することを目的として、1985年に「国際交流基金地域交流振興賞」として創設され、2005年に「国際交流基金地球市民賞」と名称を改めました。これまで理事長特別表彰1団体を含め79件の個人ならびに団体に授賞しています。

アクション



子供たちが自力で夢に向かってチャレンジできる環境づくりを目指して日本とフィリピンで活動。また、現地女性の雇用創出や自立支援につなげるため、ブランドを立ち上げる。安定した事業収入を得ることで、寄付に頼らない自立した活動を実践。

多文化まちづくり工房



外国籍住民が約3割を占める神奈川県横浜市の県営団地で日本語学習サポートや防災活動を通じて多文化共生のまちづくりを目指す。外国籍の若者の居場所になるとともに、住民との交流のきっかけとなり、自治活動のモデルとして注目される。

ダンスボックス



阪神大震災において被害の大きかった新長田を拠点に、先鋭的なコンテンポラリーダンスを神戸から世界に発信する活動を行う。地域に密着した活動とともに、海外との交流を積極的に図り、異文化間の理解を深めている。

文化芸術交流

Arts and Cultural Exchange

美術、音楽、演劇、文学、映画などの芸術から、食、ファッション等の生活文化にいたるまで、日本の文化芸術を紹介し、文化芸術分野のグローバルな交流をプロデュースし、ネットワークづくりを支援しています。

文化芸術交流

Arts and Cultural Exchange

日本の文化芸術を世界に広める

海外の人びとが日本の文化芸術に触れることで、日本人が育んできた意識や価値観を理解し、感じる機会を創出する事業を展開しています。そのために、造形美術、舞台芸術、映像・文芸、生活文化という4つの領域において、古典作品や伝統芸能、ポップカルチャーやサブカルチャー、現代演劇や現代美術等の展示、公演、出版、映画上映などを行っています。日本の文化を多方面に発信することで、芸術による国際交流の輪を広げています。

情報提供・ネットワーク

芸術や文化を通じた国際交流を効果的に進めるためには、互いの国の文化芸術に関する情報や、担い手同士のネットワークが不可欠です。国際交流基金は、舞台芸術、文学、映画などの分野において、日本の最新情報を収集し、ウェブサイトやニューズレターとして海外へ発信しています。また、芸術分野における国際展や見本市など、人や情報が集まる場を創出したり、それらの活動への支援を行っています。

造形美術

国内外の美術館・博物館などの協力を得て、日本の美術・文化を海外に紹介する大型展覧会や、現代美術、写真、工芸、建築、デザイン、日本人形などのコンパクトな巡回展を世界中で実施しています。国単位での参加が求められる「ヴェネチア・ビエンナーレ」などの国際展での日本代表作家作品の展示、海外で実施される日本美術の展覧会への助成、作家や美術関係者等の人物交流事業など、交流の推進と情報発信に取り組んでいます。

舞台芸術

歌舞伎、文楽、能・狂言、日本舞踊といった古典芸能から邦楽や民謡、またジャズ、クラシック、現代舞踊、現代演劇など、さまざまな日本の舞台芸術を紹介するとともに、国際共同制作も手がけています。また海外公演を行う団体・アーティストへの支援・助成、日本の舞台芸術情報ウェブサイト「Performing Arts Network Japan」の運営や、「国際舞台芸術ミーティングin横浜」の開催などの情報発信・人物交流に取り組んでいます。

生活文化

茶道、生け花、武道、食、大道芸など日本人が生活のなかで生み出した文化を、講演やデモンストレーション、ワークショップの形で海外の人びとに紹介し、体験してもらう機会をつくっています。その他、日本の文化を支える優れた知識や技術をもった専門家を海外へ派遣し、文化財保存・修復、スポーツや音楽の実技指導を行うなど、その国の文化振興に貢献しています。

映像・文芸

日本のテレビ番組の海外放映、海外で制作される日本に関するテレビ番組・映画への助成、日本映画祭の開催、国際映画祭における日本映画上映へのサポートなど、映像を通じた日本理解の機会をつくります。また、海外の出版社や翻訳者に向けて日本の書籍を紹介する季刊誌『Japanese Book News』を刊行。翻訳・出版への助成や、海外での図書展への参加などを通して、日本文学が海外に広まるための土壌づくりを行っています。

日中交流センター

日本と中国の次代を担う若い世代の交流を促進するため2006年に設立。中国の高校生を約11カ月間日本に招へいし、日本人と同じ学校・家庭生活を送る「中国高校生長期招へい事業」、中国国内で日本の雑誌、漫画、音楽などの最新情報を紹介する「ふれあいの場」、日中両国の若者がブログや掲示板などを通じて参加・交流することのできる「心連心ウェブサイト」の3つの事業を実施しています。



1.「茂山狂言ブラジル公演」に際し、サンパウロ大学演劇学科で行われたワークショップ[ブラジル・サンパウロ]／2.韓国で開催した「われわれ！ 日韓映画祭」に駆けつけた崔洋一監督[韓国・ソウル]／3.「メキシコ・中米歌舞伎舞踊公演 歌舞伎—400年の伝統との出会い」での舞台「石橋」[メキシコ]／4.中国、イタリア、ハンガリー、オーストラリアなどを巡回した「キャラクター大国、ニッポン」展[ハンガリー・ブダペスト]／5.クウェート、レバノン、パレスチナより4名のキュレーターを招へいた中東学芸員招へいプログラムの際に行われた、学芸員によるプレゼンテーション／6.「2010年トルコにおける日本年」を記念して実施された「日本・トルコ共同制作現代音楽公演 Sound Migration」の出演者達[トルコ、エジプト、ハンガリー]／7.文化人招へいプログラムにより来日した、ヴァリハ奏者・研究家のザンバ(ジャン・パティスト・アンジアナリマナ)氏／8.パリ日本文化会館で開催された、郷土料理や日本の菓子を紹介する「郷土料理セミナー」シリーズの「金沢—加賀料理」[フランス・パリ]／9.「近代日本工芸 1900-1930 — 伝統と変革のはざまに “Les arts decoratifs japonais face à la modernité 1900-1930”」展会場[フランス・パリ] 撮影：C.-O.Meylan

日本の美術・文化への理解を深める 催しを海外で開催

■新次元 マンガ表現の現在

2000年代以降に話題になった日本マンガ9作品に焦点をあて、マンガ独自の表現の現在を紹介する展覧会を開催しました。戦後日本のストーリーマンガは独自の世界に到達し、いまなお発展を続けています。美術館で行われるマンガ展として、ただ原画を展示するに留まらない新たな展示を探る視点をもった本展は、キュレーターに高橋瑞木氏、空間構成に豊嶋秀樹氏を迎え、それぞれの作品世界を空間の中で立体的に展開することを試みました。

2010年度は水戸芸術館と韓国・ソウルのアートソングェセンターで開催。タイムラグなく日本マンガが翻訳・受容されている韓国では日韓のマンガ事情を反映したシンポジウムも併せて実施し、これまでにない展覧会として美術雑誌に特集が組まれました。現代の日本文化を代表するソフトパワーとして注目を集めるマンガやアニメですが、アジア各国での受容はそれぞれ異なっており、2011年度の巡回先であるハノイやマニラではまた異なる反響が期待されます。[水戸芸術館現代美術ギャラリー、2010年8月14日～9月26日、アートソングェセンター(ソウル)、2010年12月4日～2011年2月13日]

■近代日本工芸1900-1930—伝統と変革のはざまに

パリ日本文化会館において、1900年から1930年の間に制作された陶芸、染織、漆工を中心とした近代日本の工芸品約70点を紹介する展覧会を行いました。当時のパリは、アール・ヌーヴォー、アール・デコという近代芸術運動の絶頂期にあり、世界中の芸術家を惹きつけていましたが、同時期に日本でつくられたこれらの作品は西洋のモダニズ

ムの影響を受けた意匠と、友禅、漆、七宝等の日本伝統の技を巧みに組み合わせ、発展させたものです。オープニングにミッテラン文化・通信大臣の公式訪問のほか、会場には多数の来場者が集まりました。展覧会に伴い、京都国立近代美術館とパリ日本文化会館の共催による国際シンポジウム「東西文化の磁場」も開催され、熱心に聞き入る観客の間に、新たな日仏文化交流の対話の場が生まれました。

[パリ日本文化会館(フランス)、2010年10月13日～12月23日]

■学芸員交流

学芸員交流は、世界各国のキュレーターをグループで招へいし、日本各地の美術館やギャラリー、作家アトリエ等への視察を通して、日本の美術状況に対する理解と関心を深めてもらうとともに、日本人学芸員との交流の機会を提供し、将来にわたる連携の強化を促すものです。

2010年度は中東学芸員グループ(2011年2月7日～19日:クウェート、パレスチナ、レバノンより計4名)と米国学芸員グループ(2011年3月7日～19日:アメリカ各地より計11名)を招へいし、東京、金沢、京都、大阪、兵庫、岡山、高松等の各都市を訪ね、日本の美術関係者との間で情報交換の場がもたれました。

参加者からは、自国と日本の美術館のビジョンやシステムの違いを指摘する声や、日本人キュレーターとのネットワークが広がったこと、日本の文脈のなかで日本美術を実見することの重要性を再確認したこと、日本を近く感じるようになり、今後、日本美術の企画を進めていくにあたって自信をもてたことなど、多様な意見が寄せられました。



[上]「新次元 マンガ表現の現在」展の会場 撮影: Myoungrae Park
[右]「近代日本工芸1900-1930」展ポスター

古典から前衛、クロスオーバーまで、 舞台上で交錯する日本と世界の文化

■南米音楽公演——TRANS-CRIOLLA

～響き合う地平の向こうへ～

2010から11年にかけて、アルゼンチン、ウルグアイ、チリは建国200周年を迎えました。さまざまな歴史のなかで人びとの心を支えてきた各国の音楽に敬意を表し、その国のアーティストとともに建国200周年を祝う公演として、南米音楽界期待の若手歌手である松田美緒氏、日本を代表するパーカッショニストのヤヒロトモヒロ氏、ウルグアイの巨匠ピアニストであるウーゴ・ファトルーソ氏のトリオが3カ国を巡演しました。フォルクローレ、タンゴ、カンドンベ、ヌエバ・カンシオンなど、各国で大切にされている音楽が3人の奏でる音と混ざり合い、会場が一体となって大いに盛り上がりました。

本公演をきっかけに、共演したカンドンベグループのレイ・タンボール(ウルグアイ)やチリの国民的人気歌手であるフランチェスカ・アンカロラ氏の初来日も実現、日本にもTRANS-CRIOLLAのサウンドが響き、南米公演がきっかけで結実した音楽の輪が広がりました。その後も、この公演で生まれた交流の種が日本と南米で芽を吹き、大小さまざまな形で育まれています。

[アウディトリオ・インマクラダ・コンセプション(ブエノスアイレス)、コルドバ大学物理・数学・自然科学学部大講堂(コルドバ)、マシオ劇場(ウルグアイ・サンホセ)、アウディトリオ・ネリ・ゴイティエリニョ(モンテビデオ)、バルパライソ大学文化センター(バルパライソ)、ペニャロレン区文化センター(サンティアゴ)、2010年8月6日～14日]

■メキシコ・中米歌舞伎舞踊公演——歌舞伎—400年の 伝統との出会い

「日本メキシコ交流400周年」を記念して、400年の歴史をもつ歌舞伎舞踊公演をメキシコと中米2カ国で巡回実施



[左]「南米音楽公演——TRANS-CRIOLLA」から
[右]「舞踏ロシア・中国公演——舞踏・大いなる魂」から

しました。歌舞伎俳優の中村京蔵氏、中村又之助氏、市川喜之助氏をはじめ長唄・三味線・鳴物など総勢13人が出演し、歌舞伎につけられる音楽の意味、衣裳の着付け、化粧のしかたなどを実演で紹介するとともに、代表的な女形舞踊の「鶯娘」と、獅子が舞う「石橋(しゃっきょう)」を上演しました。海外公演の経験も豊富な京蔵氏、又之助氏による楽しい話と流麗かつ迫力のある舞に、各地で観客から惜しみない拍手が送られました。

[モンテレイ市立劇場、メキシコ市立劇場(メキシコ)、サンサルバドル国立劇場、サンタアナ国立劇場(エルサルバドル)、マヌエル・ボニージャ国立劇場(ホンジュラス)、2010年10月8日～21日]

■舞踏ロシア・中国公演——舞踏—大いなる魂

「舞踏」の創始者と言われ、ヨーロッパをはじめ世界各国で高い評価を受け、没後25年を迎える土方巽の舞踏世界を紹介する事業を、ロシアと中国で実施しました。山本萌氏率いる金沢舞踏館(ロシア公演)と、和栗由紀夫氏(中国公演)による公演を中心に、土方の舞台公演の記録など貴重な映像の上映と専門家によるレクチャー、世界的な写真家である細江英公氏が撮影した「鎌鼬」などの写真や公演ポスターの展示もあわせて行われました。ひとつのジャンルにとどまらず美術・映像・写真など同時代の前衛芸術をも巻き込み、西洋的な芸術表現に対するリアクションとして発展した土方の舞踏世界は、コンテンポラリーな芸術が注目されつつある両国において大きな衝撃を与えました。

[リツェディ劇場、シェミヤキン基金(サンクトペテルブルグ)、ドラマ芸術学院(モスクワ)、ユーレンス・センター・フォー・コンテンポラリー・アート(北京)、TNT劇場(北京)、ロシア公演2010年11月20日～28日、中国公演2011年2月26日～3月6日]



アジア、ロシアなどで 日本の映像・文芸と親しむ機会を創出

■黒澤明生誕百周年記念 アジア巡回上映会を開催

日本が世界に誇る映画監督、黒澤明(1910-1998)の生誕百周年を祝い、韓国、フィリピン、インドネシア、タイ、マレーシアの5カ国8都市で、『羅生門』(1950)や『七人の侍』(1954)といった代表作を含む23作品を巡回上映しました。

最初の巡回先となったソウルの韓国映像資料院(KOFA)では、黒澤映画を語るには欠かせない存在である、スクリーンターの野上照代氏、俳優の仲代達矢氏をゲストに迎えました。韓国の国民的俳優であるアン・ソング氏をはじめ、韓国著名映画人も多数駆けつけ、華やかな幕開けとなりました。

これまでアジアの国々にて黒澤作品が紹介される機会は決して多くはありませんでしたが、今回の巡回上映において、5カ国合計約3万9千人の観客が、黒澤監督の世界を堪能しました。

[黒澤明生誕百周年記念 アジア巡回上映会(韓国、フィリピン、インドネシア、タイ、マレーシア)、2010年7月1日～2011年3月20日]

■ロシアはじめ多数の国際図書展に参加

2010年度は各国の大使館や出版文化国際交流会(PACE)と協力し、日本の書籍の情報を発信するため海外14カ国・14都市の国際図書展に参加しました。なかでも、ロシアの首都モスクワで開催された第12回モスクワnon/fiction国際知的図書展は19カ国から300団体が出展する大規模な図書展で、年々増加する入場者数は、2010年には約3万3千人に上りました。出版文化国際交流会と共同で出展した日本ブースには、書籍363冊、カタログ類1290部が展示され、約2000人が来場し、大変な賑わいでした。

この図書展にあわせ、作家の黒川創氏を派遣し、図書展

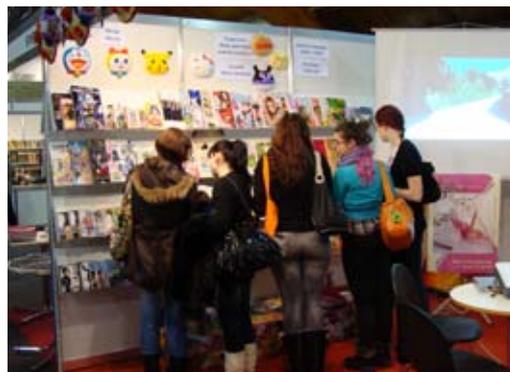
会場、モスクワ文化センター、サンクトペテルブルク大学にてそれぞれ対談、講演会、座談会を開催しました。300もの出展者が居並ぶなか、特定の国、それもアジアのある国のみに注目が集まることは非常に稀ですが、2009年に文化人招へいプログラムで来日した作家オリガ・スラヴニコワ氏と黒川創氏との対談は地元メディアの関心を強く引き、ロシア国立テレビのなかで文化ニュースの権威である番組「文化テレビ」で、日露の両作家の対談が取り上げられました。[ロシア、2010年12月1日～5日]

■『日本宗教史』の翻訳出版への助成

国際交流基金は各国の出版社や翻訳者に向けて日本の最新動向を伝えるため、英文ニューズレター『Japanese Book News』を発行し、新刊書の情報を提供しています。また年に1回申請を受け付けている一般公募プログラム「日本理解促進翻訳・出版助成プログラム」を通して、出版・翻訳経費の一部を助成しています。

こうした多様な面から実施している支援の成果として『日本宗教史』(末木文美士著)がベトナムの出版社(アルファ・ブックス)から2010年度に出版されました。これは、過去に『Japanese Book News No.49』で紹介し、その後、「推薦著作リスト」にも掲載することで、海外で出版されることを勧奨してきた宗教学の名著ですが、今般の出版助成を得て、ベトナムで出版されたものです。

また、『Japanese Book News No.57』(2008年秋号)で紹介した『食堂かたつむり』(小川糸著、ポプラ社)は、イタリア語に翻訳され、2011年夏、イタリア国内の文学賞「バンカレツラ賞」の料理部門賞を受賞しました。



[左] 韓国で行われた黒澤明生誕百周年記念上映会ポスター
[中] ラトビアで行われた図書展の日本ブース
[右] 『日本宗教史』ベトナム語版

ロボット技術、日本料理、史跡保存など 幅広い分野で市民が交流

■あざらし型セラピーロボット「パロ」、東南アジアへ

産業技術総合研究所の柴田崇徳主任研究員を東南アジア4カ国へ派遣し、同研究所が開発してきたあざらし型ロボット「パロ」を紹介するイベントを行いました。セラピーロボットとして福祉・医療現場で活用されているパロの役割に、多くの参加者が興味をもち、各会場とも講演後は、パロを囲む人だかりができていました。

[ベトナム、シンガポール、ブルネイ、パキスタン、2010年9月28日～10月9日]

■フランス、スイスで「金沢——加賀料理」を紹介

日本文化を紹介する事業のなかで、日本の食文化は常に高い関心を集める分野です。2010年度は、郷土料理をテーマに企画を公募し、フランスとスイスで、金沢の老舗料亭「つば菖」の川村浩司料理長らによる郷土料理セミナー「金沢——加賀料理」を行いました。金沢の歴史的背景や文化的背景を踏まえ、加賀料理を紹介し、これまで知られていなかった新しい日本食を紹介することができました。

[フランス、スイス、2011年2月27日～3月13日]

■山下泰裕氏、井上康生氏による柔道指導

2010年7月、日本を代表する柔道家山下泰裕氏と井上康生氏をイスラエル、パレスチナに派遣し、現地の柔道選手に対する指導を実施。少年少女を対象とした合同の柔道教室では子どもたちがたくさんの汗をともに流しました。その後、2010年12月にはNPO法人柔道教育ソリダリティーによって、イスラエル、パレスチナの少年選手達が福岡国際中学生柔道大会に来日。3カ国の未来の柔道選手をつなぐこの活動は、新聞などで大きく報道されました。

■サハリンにおける樺太時代の史跡保存事業

2008年と2009年に、北海道大学、ロシア・サハリン州

文化局などと共同で、老朽化が進む樺太時代の歴史的建築物等文化遺産の修復・保存を巡って、2回の国際シンポジウムを実施してきました。2010年には、建築設計、塗装、石材、瓦等各分野の日本人専門家グループを派遣して現地調査を実施。まとめられた報告書は、2011年6月にサハリン州文化省に手渡され、今後の保存・修復計画の指針として活用されることになりました。

[ユジノサハリンスク、2010年10月5日～10月9日]

■ドイツ語圏舞台芸術関係者(ドラマトゥルク)のグループ招へい

2011年1月に始まった日独交流150周年を記念して、ドイツ、オーストリア、スイスの若手・中堅ドラマトゥルク(劇場・フェスティバルの企画・キュレーション、舞台作品の芸術面の考証、企画構成に関わる役職)6名をグループで招へいしました。日本の舞台関係者やアーティストと交流した他、ドイツ演劇の最新事情に関するセミナー(共催:東京ドイツ文化センター)では、劇場の運営方針決定プロセスや、公的機関の文化活動に対する支援の考え方の違い等、熱い議論が交わされました。

[東京、那須、京都、2010年11月23日～12月7日]

■日韓プラストビート・プロジェクト

ソウルで集中的に日本を紹介した「日韓新時代」事業の一環として、日韓の大学生がひとつの「会社」を組織、自分たちでゼロから音楽イベントをプロデュースし、収益を社会貢献活動に寄付するという二国間社会教育プログラムを行いました。約3カ月間の協働の過程で、学生たちは二度の合宿やスカイプ会議を通して会社名、役職、会社理念、イベントコンセプト、寄付先について徹底的な議論を行い、時にはぶつかり合いながらもソウルと東京でライブ・イベントを成功させ、収益をNPOに寄付することができました。

[ソウル、東京、2010年11月～2011年2月]



[左] 郷土料理セミナー「金沢——加賀料理」

[中] 柔道指導を行う井上康生氏

[右] 「プラストビート・プロジェクト」で議論する日韓の大学生



日本での生活体験、ウェブサイトや中国の拠点など、多角度から日本理解の機会をつくる

■中国高校生長期招へい事業

日中交流センターでは、中国の高校生を11ヵ月間招へいし、日本の高校に通い、同世代のクラスメートやホストファミリーなど多くの日本人びとと交流するなかで、日本の社会や文化を、実感に基づいて理解してもらおう機会を提供しています。5年目を迎える2010年度には、7月に前年度から日本に滞在していた第四期生35名が帰国し、続いて9月に第五期生38名(男子10名、女子28名)が来日しました。高校生たちは、全国各地の高校で、部活動や学校行事、ホームステイ生活を経験することにより自立心や協調性を身につけ、また、受け入れ校やホストファミリーは、日中の未来の架け橋となる学生たちを包み込む大切な役割を担っていただきました。あるホストファミリーの方が「初めはコミュニケーションをとるのに困りましたが、徐々に内面まで話し合えるようになり嬉しく思いました」と話していたように、長期的に滞在することで生まれる深いつながりは、今後の日中の交流をより強固にしていくことでしょう。

■「心連心ウェブサイト」運営

日中交流センターが運営する「心連心ウェブサイト」(<http://www.chinacenter.jp/>)は、日中の最新情報を発信し、同時に、日中同時翻訳機能を使って日本語・中国語のどちらでも意見交換をすることができるブログ形式のコンテンツを備えています。これらは、国際交流基金のさまざまなプ

ログラムで来日・訪中する学生たちが事業終了後も交流を続ける場としての役割だけでなく、等身大の両国の若者の姿を紹介することで、未来の日中友好の礎を築くことをめざしています。このウェブサイトの対象は両国の若い世代ですが、より広い世代からの反響も大きく、「学生たちの目に実際の日本がどう映っているのか、その感想を見ることによって、日本の文化や特徴などを再認識することも多いです」といった声も寄せられています。

■「ふれあいの場」の設置・運営

「ふれあいの場」は、日本に関する情報が少ない中国の地方都市において、日中の文化が体験でき、日本の雑誌・書籍・CD・DVD等を通して現代日本文化に触れられる、若者を中心とした交流の場です。2009年までに、四川省成都市、吉林省長春市、江蘇省南京市、吉林省延辺市、青海省西寧市、江蘇省連雲港市、黒龍江省ハルビンの7ヵ所が開設され、2010年度はさらに重慶市、広東省広州市に新設されました。「ふれあいの場」ではさまざまな日中文化交流イベントを実施しています。2011年3月に行った学生交流事業では広州と南京の「ふれあいの場」で、日本の大学生が企画・参加する交流イベントを開催しました。また、「ふれあいの場」訪問事業では、日本の高校生が成都を訪れ、現地の学生らと交流しました。



[左] 第五期生来日歓迎レセプションにて
[中] 「心連心ウェブサイト」内の留学生日記
[右] 「広州ふれあいの場」で日本の餅つきを体験





海外における日本語教育

Japanese-Language Education Overseas

海外の人たちに日本語を知ってもらうことは、
日本への親しみや理解を世界に
広げることにつながります。

国際交流基金は日本語教育が世界で
活発に行われるよう、全世界規模での
日本語能力試験の実施や教材開発、
海外日本語講座の運営、日本語教育の専門家の
海外への派遣、海外で教える教師の訪日研修など、
さまざまな側面から日本語教育を支援しています。

海外における日本語教育

Japanese-Language Education Overseas

海外日本語教育の促進

国際交流基金が日本語教育事業を行うなかで、その使命の重要な部分をなすのは日本語教育の基礎基盤をつくることです。日本語教育のノウハウの共有、教育機関の調査や情報交流の場の提供など、目に見えにくくても、日本語教育を世界に広げるためになくてはならない基盤をつくるために、継続的な活動を続けています。

教師・教育機関への支援

国際交流基金は、一人の日本語教師の指導が、たくさんの生徒に影響を与えることを重視し、海外の現場で日本語を教える教師の指導力向上を図るプログラムを展開しています。教師育成だけでなく、海外の日本語教育機関への助成や日本語教育のための催しに対する助成なども行います。

学習者への支援

国際交流基金は、ふたつの側面から学習者を支援します。ひとつは教材の制作、将来の教師の養成等、日本語の学習環境の向上をはかる間接的支援。もうひとつは諸外国の外交官、政府・公的機関の職員、研究者等、その活動上、日本語の習得を必要とする人を対象とした研修実施といった直接的な支援です。海外の教育機関単独では、実施や継続が難しいタイプの学習者支援を継続して行っています。



日本語専門家の海外派遣／ 教育機関・プロジェクト支援

海外の教育機関に日本語教育の専門家や指導助手を派遣しています。日本語専門家の活躍の場は広く、世界各地で年間101名が活躍しています。また、海外の非営利団体が運営する日本語講座や、海外で開催される日本語弁論大会、日本語教育に関する学術会議・ワークショップ、日本語教師研修会等への助成も行っています。

JFにほんごネットワーク (さくらネットワーク)

さくらネットワークは、日本語普及と教育の質の向上のため、世界各地の中核的な日本語教育機関や日本語教師会をつなぐネットワークです。国際交流基金の海外拠点と、国や地域全体の日本語教育に波及効果のある事業を実施する機関・団体が中核メンバーとなり、連携して世界各地の日本語教育をサポートしています。

海外日本語教師への研修 [日本語国際センター]

海外の外国人日本語教師のうち、各国・地域で指導的役割を果たしている人や、今後指導的立場にたつ人に対する高度な研修を行っています。また、教授経験の浅い教師対象に日本語力と日本語教授能力の向上を目指すなど、参加する教師の属性に応じて、さまざまな研修プログラムを実施しています。

海外日本語教育機関調査

世界中に広がる国際交流基金の拠点、在外公館等の協力を得て、全世界で日本語教育を行う機関の調査を3年毎に実施しています。これは日本語教育に関する世界で唯一の大規模な調査で、調査結果は新聞・雑誌等のメディアで数多く引用されます。

JF日本語教育スタンダード開発 日本語教材開発

日本語の教え方、学び方、学習成果の評価の仕方を考えるために独自のツールの開発を継続的に進めており、海外における日本語教育のさまざまな基盤整備の中心的役割を担っています。また、インターネットや映像を活用した教材開発・運営・普及を行っています。

日本語能力試験 [試験センター]

日本語を母語としない人を対象に日本語能力を測定し、認定するための試験で、世界各地および日本国内で1年に2回、一斉に実施されます。2010年は世界58の国と地域で、約61万人が受験しました。小学生から社会人まで幅広い層が受験し、実力の測定のため、就職や昇進のため、大学等への入学のためと、さまざまに活用されています。

海外日本語学習者への研修 [関西国際センター]

日本と各国間の良好な関係を築くために重要な任務にあたる諸外国の外交官、政府・公的機関の若手職員や、研究者、大学院生などを対象に日本語研修を行っています。また、諸外国での日本語教育を奨励するため、特定国の日本語学習者で大学生、高校生のなかから成績優秀者を日本に招く研修も実施しています。



1



2



3



4



5



6



7



8

1. 関西国際センターで実施された「国内大学連携大学生訪日研修」に参加した各国の大学生。この日は大相撲を観戦／2. ケニアのケニヤッタ大学で日本語を学ぶ学生達が、授業の一環として日本料理体験を楽しむ [ケニア・ナイロビ]／3. カナダ・マニトバ州で行われたプログラムで日本の遊びに興じる現地の高校生達／4. クアラルンプール日本文化センターで行われている日本語授業風景 [マレーシア・クアラルンプール]／5. 奈良で東大寺を見学する日本語国際センターの研修生たち／6. 西スマトラ州パダン市で行われた日本語教師会小研究会 [インドネシア・パダン]／7. アラビア語版の『基礎日本語学習辞典』が出版され、記念式でメディアのインタビューに答える関係者 [エジプト・カイロ]／8. パクー国立大学で日本語を学ぶ学生が折り紙クラブを結成。難易度の高い作品も [アゼルバイジャン・バクー]

日本語教育の専門家派遣と 海外で活躍する教師間のネットワークを拡充

■世界各国で日本語教育の専門家が活躍

国際交流基金は、海外各国における日本語教育の定着と自立化の促進を目的に、各地に日本語教育の専門家を派遣しています。派遣された日本語専門家は、現地教師の育成、カリキュラム・教材作成に対する助言、教師間ネットワークの構築支援、教室での日本語教授など、それぞれが取り組むべきミッションのもとに活動を行っています。2010年度は39カ国にむけて101人の日本語専門家を派遣しました。

専門家たちは各地の関係者とネットワークを築きながら、日々活動しています。たとえば、「トルコにおける日本年」の関連事業として2010年10月に実施された「第19回アンカラ日本語弁論大会」では、中東地域に派遣されている日本語専門家たちが、現地の日本語教育関係者と一致団結し、日本語弁論大会としては世界で初めて、インターネットライブ中継を実現させました。配信時の視聴者数は約1,500人。中東を中心とする各国からのコメントも多数寄せられました。他にも、日本語教育関係者インタビュー動画のネット配信など、日本語教育にITを取り入れることで、派遣された国・地域の日本語教師のネットワーク構築・強化に協力しています。こうした、教師間ネットワークの立ち上げ・強化を支援することも、日本語専門家の大切なミッションのひとつです。

■世界各地の日本語教育プロジェクトを支援

JFにほんごネットワーク（通称：さくらネットワーク）は、世界各地の日本語普及と教育の質の向上のため、国際交流基金の海外拠点や、国際交流基金と協力・連携をとりながら活動する各地の中核的な日本語教育機関、日本語教師会をつなぐネットワークです。2008年にネットワークの構築を

開始し、2010年度末までに中核メンバーを100機関にすることを目標としてきましたが、2010年度末には33カ国1地域102機関が参加し、目標を達成することができました。こうしたネットワークを活かすため、「さくら中核事業」というプログラムを設け、海外拠点においてさまざまな日本語事業を実施しているほか、他の中核メンバーが実施するプログラムのうち、国や地域全体での日本語の普及・拡大・発展につながる波及効果の高い事業を支援しています。

また、2010年度には、国際交流基金の海外拠点のない国を対象として、日本語教育機関に対する公募助成プログラムの大幅な見直しを行い、各国・地域のニーズに対応した「日本語普及活動助成」をあらたに公募事業として開始しました。

2010年度に実施された「第2回中米カリブ日本語教育セミナー」は、こうした支援を受けて実現した事業のひとつで、中米カリブ日本語教育ネットワークにより実施されました。このネットワークは、一国では決して日本語学習者の規模が大きいとは言えない中米地域の国々だが、他国との連携によって各国の日本語教育の発展を目指そうと、2009年に立ち上がりました。セミナーには、キューバ、ドミニカ共和国、グアテマラ、エルサルバドル、ホンジュラス、ニカラグア、コスタリカ、パナマの計8カ国から日本語教師が参加。ネットワークが立ち上がったことで、それぞれの機関で孤軍奮闘している教師が、他国の同僚の存在を知り、情報を交換し、悩みを共有し、相談しあえる環境がつけられました。セミナーやネットワークの存在は、それぞれの現場で日本語教師を続けていくうえでの励みにもなっています。



[左] インドの中等教育課程での日本語の授業

[中] モンゴル国営放送の「ラジオ日本語講座」の収録風景

[右] スリランカでの日本語教育の拠点、ケラニア大学の日本語教師達

新しくなった「日本語能力試験」 ついに運用開始

日本語能力試験 (Japanese-Language Proficiency Test 略称: JLPT) は日本語を母語としない人たちの日本語能力を測定し、認定するための試験で、国際交流基金は世界各地の現地共催機関と協力して試験を実施しています (日本では、試験の共催者である日本国際教育支援協会が実施しています。台湾での試験は2010年より財団法人交流協会と共催しており、実施業務は交流協会が担当しています)。

■新しい「日本語能力試験」の初めての実施

日本語能力試験は、1984年の開始以来、25年以上の歴史がありますが、近年、試験の受験者層が拡大して受験目的が多様化し、試験の結果 (成績) は大学入試や資格試験の要件、就職や昇進・昇格にあたっての判断基準など、さまざまに活用されるようになりました。そのため、これまでに発展してきた日本語教育学やテスト理論の研究成果や蓄積してきた試験結果のデータなどをふまえて、2010年より、新しい「日本語能力試験」 (新試験) を開始しました。

[試験改定のポイント]

①コミュニケーション能力重視

日本語の文字、語彙、文法などの知識だけではなく、その知識を使ったコミュニケーション能力をより重視しています。

②認定レベルが5段階に

レベルが4段階 (1～4級) から5段階 (N1～N5) となり、受験者が自分に合ったレベルを選びやすくなりました。

③得点等化の実施

日本語の能力がより正確に測れるように、得点の出し方が変わりました (等化による尺度得点の採用)。

④『日本語能力試験Can-do自己評価レポート』の提供

受験者やまわりの人が「このレベルの合格者は日本語を

使ってどんなことができそうか」のイメージをつくるための参考資料を提供します。

■海外で実施された新試験を約42万人が受験

2010年は7月4日と12月5日の2回、海外において新試験を実施し、あわせて約42万人が受験しました。7月の第1回試験は、海外13の国・地域の80都市と日本国内で、N1からN3の試験を行いました。国際交流基金が実施業務を担当した海外12カ国の応募者数は約18万6千人、受験者数は約15万4千人でした (第1回試験としては実施国は10カ国、実施都市は21都市の増加)。

12月の第2回試験は、海外57の国・地域の186都市と日本国内で、N1からN5の全レベルが実施されました。国際交流基金が実施した海外56カ国の応募者数は約31万4千人、受験者数は約26万7千人でした。2010年第2回試験から、ポルトガル、チェコ、モロッコの3カ国で新たに試験が実施されるようになり、また、高陽・富川 (韓国)、フィラデルフィア・ボストン (米国)、ヴェネツィア (イタリア)、ハンブルク (ドイツ) が新たに試験実施都市となりました。

■JTPT公式ウェブサイトをリニューアルしました

新試験の開始に伴い、日本語能力試験公式ウェブサイト (<http://www.jlpt.jp/>) をリニューアルしました。試験の実施都市や受験手続きなどの情報に加えて、新試験の問題例をエラーニング形式で体験できるコンテンツや、新試験についてのよくある質問など、新しい内容を充実させました。多言語化も進め、2010年度中には日本語版・英語版・中国語 (簡体字) 版の3言語版を公開しました。2010年7月のリニューアルオープンから2011年3月末までに357万件 (ページビュー) のアクセスがありました。



[上] ワルシャワでの日本語能力試験の会場

[右] リニューアルされたJLPT公式ウェブサイト

400名を超える海外の日本語教師の研修と 海外大学生の日本語および文化理解の機会を創出

■ 56カ国・425名の日本語教師が研修修了

国際交流基金の「海外における日本語教育」事業のなかのひとつの柱は、教師を支援するための事業です。2009年に国際交流基金が実施した「日本語教育機関調査」によると、海外での日本語教育上の問題点として、日本語教師の数の不足だけでなく、教師の日本語教授技術や日本語運用力の不足や教材不足が挙げられています。こうした問題に対応するため、国際交流基金の附属機関である日本語国際センター（埼玉県さいたま市）では、海外で活躍する日本語教師の訪日研修や、教材・カリキュラム開発などの教師支援活動を行っています。

日本語国際センターは、1989年に設立されて以来、8千人以上の日本語教師を迎えており、海外の日本語教師が研修を受ける機関として、高く評価されています。

2010年度は、2週間から1年間までのさまざまな19の研修を行い、のべ56カ国から425人の日本語教師が日本語国際センターの研修に参加しています。

■ 6カ月間の長期研修に挑んだ53名

海外日本語教師長期研修は、教授経験が6カ月以上5年未満の若手外国人日本語教師を対象とした6カ月の研修で、2010年度は33カ国から53名が参加しました。研修参加者は、日本語や日本語教授法の授業だけでなく、書道、折り紙、生け花、着付け、茶道、日本舞踊等の文化体験プログラムや、日光や関西方面への研修旅行にも参加します。

研修参加者は日本滞在を活用し、日本語運用力の向上に努め、日本社会・日本文化への理解を深めるように精力的に活動していました。彼らの今後の活躍が、これからの日本語教育の発展につながっていくことを期待しています。

■ 40名の外交官・公務員が学んだ関西国際センターの活動

日本語教育支援のもうひとつの柱は「日本語学習者への支援」です。多様化する日本語教育のニーズに対応するため、1997年に大阪府田尻町に設立された関西国際センターでは、職業上、日本語能力を必要とする海外の専門家を対象とした「専門日本語研修」と、海外で日本語を学んでいる大学生・高校生等を対象とした「日本語学習者訪日研修」を実施し、日本語教育支援ウェブサイト「アニメ・マンガの日本語」など、Eラーニング開発事業にも取り組んでいます。

専門日本語研修のなかでも、「外交官・公務員日本語研修」では日本の外務省の協力を得て、諸外国の外務省および政府・公的機関の若手職員を8カ月間招へいし、日本語と日本事情の研修を行っています。2010年度は、37カ国から40名が参加しました。

日本語の授業は、在日大使館勤務をはじめ、各国政府機関内で日本にかかわる業務に就くことが期待されている研修参加者のニーズに対応し、職務に役立つコミュニケーション能力を身につけることをめざして、オーラル・コミュニケーションに重点をおいたカリキュラムになっています。また、専門家による講義や文化体験、官公庁・企業・文化施設訪問、研修旅行など、日本社会や文化に対する理解を深め、日本国内でのネットワークを構築するための研修活動も用意しています。

これまで外交官628名（1981～2010年度）、公務員109名（1997～2010年度）に対する研修を行い、外交官日本語研修では、202名の在日大使館勤務者（2009年10月現在）、7名の駐日大使（2010年12月現在）を輩出するなど、研修修了者は日本にかかわる分野で活躍しています。



[上] 日本語国際センターで研修中の日本語教師
[右] 「国内大学連携大学生訪日研修」で各国から来日した大学生



長年にわたって開発してきたオリジナル教材をさらに拡充、多国語版へ展開

■『まるごと 日本のことばと文化(入門A1)』試用版開発

本教材は「JF日本語教育スタンダード」に準拠した日本語教材の試用版で、「JF日本語教育スタンダード」の理念である、相互理解のための日本語の実践モデルの提示、国籍・民族等を超えた日本語使用者間のコミュニケーションのための日本語、特定の課題を協働で遂行する能力、複合的視野・自文化への視点を含む人間的豊かさの獲得を目指すための日本語能力を培える日本語教材の制作を目的として開発を行いました。

■WEB版「エリンが挑戦!にほんごできます。」

あらたに4カ国語版を公開

WEB版「エリンが挑戦!にほんごできます。」は、公開以降、1年弱で世界176の国と地域から300万を超えるアクセス(ページビュー)があり、日本語と日本文化に関心があるたくさんの人達に活用されています。2010年度は、それまでの日英2カ国語に加え、スペイン語、ポルトガル語、中国語、韓国語の4カ国語版の追加制作をすすめました。

■『国際交流基金 日本語教授法シリーズ』全巻刊行

本シリーズは、日本語国際センターが長年にわたって実施している海外日本語教師研修の経験をもとに作成した日本語教授法教材です。実際に研修の現場で指導にあたってきた講師陣が執筆を担当し、日本語教授法のほぼ全般にわたるテーマをまとめました。2010年度は、第3巻『文字・語彙を教える』、第10巻『中・上級を教える』、第12巻『学習を評価する』を刊行し、シリーズ全巻を刊行しました。

■「アニメ・マンガの日本語」

—スペイン語版、韓国語版、中国語版を公開

いまや日本のポップカルチャーを代表する存在であるアニメやマンガは、世界の若者の間で絶大な人気を誇り、多くの日本語学習者がアニメやマンガをきっかけに日本語を

学び始めるとも言われています。国際交流基金ではこの点に着目し、日本語学習者のさらなる拡大をめざし、楽しみながら日本語や日本文化が学べるEラーニングサイト「アニメ・マンガの日本語」を2010年2月に公開しました。

アニメやマンガでは、独特のキャラクターが登場し、またさまざまなジャンルがあるため、日本語の教科書や辞書に載っていない表現も多く、日本語学習者にとっては理解が難しいようです。

対象となるのは、日本のアニメやマンガが好きな初級から上級までの日本語学習者。サイトでは、海外で人気のアニメ・マンガ作品で実際に使われた台詞に基づいた表現を多数とりあげ、教科書にはない生き生きとした日本語を、アニメ・マンガの世界観のなかで学ぶことができます。興味やレベルによって学習内容や学習方法をユーザーが選び、クイズやゲームを通して楽しく学ぶ工夫もあります。アニメ・マンガの典型的なキャラクター(男の子、女の子、野郎、侍、おじいさん、お嬢様、執事、大阪人)の特徴的な表現を学んだり、「恋愛」「学校」「忍者」「侍」など、海外で人気のあるジャンルによく現れる台詞や擬声語・擬態語、背景となる文化を学ぶことができます。

2010年度には英語版に加えて、新たにスペイン語、韓国語、中国語の3カ国語版を公開。サイトの利用も順調に増え、公開以来、世界の186カ国・地域から約260万アクセス(ページビュー)を記録しています(2011年3月31日現在)。また、フランスのパリで開催され、約17万人が集まった「JAPAN EXPO」をはじめとして、オーストラリアやスペインなど、各地で開催されるポップカルチャーイベントでの国際交流基金出展ブースなどで、アニメ・マンガという「日本文化」と「日本語学習」をつなぐツールとして活用されています。



[上] ウェブサイト「アニメ・マンガの日本語」より
[左] 『国際交流基金 日本語教授法シリーズ』全巻

海外における日本語教育の現状調査実施と JF日本語スタンダードの公開

■「海外日本語教育機関調査」2009年度調査の速報値を公開

国際交流基金では、世界の日本語教育の現状を正確に把握し、今後の日本語教育の施策に活用するため、3年毎に全世界を対象とした「海外日本語教育機関調査」を実施しています。

調査にあたっては、国際交流基金の海外拠点のみならず、世界各地に派遣されている日本語専門家、在外公館、支援先機関の協力を得ています。この調査では、学習者数、教師数、学習目的、問題点等のアンケート調査を行い、世界の日本語教育に関する基礎的なデータや情報を提供することで、関係者が情報交換しながら交流を進めていく際に役立つツールとなることを目的としています。

2009年度調査結果では海外の日本語学習者は全世界で365万人と大きな増加を示し、学習環境や学習目的の多様化が見えてきました。この調査結果は日本語教育の状況を知る手がかりとして、国内外の研究者、日本語関係機関や国際交流団体など多くの人に利用されています。2010年度は2009年度調査の速報値を公開するとともに、詳細にわたるデータ分析結果を報告書にまとめました。

また、この調査をもとにウェブサイト上で公開している「日本語教育 国・〈地域〉別情報」では、海外における日本語教育の実施状況、教育制度、教科書、シラバス、教師および学習者に関する最新情報などを掲載しています。こちらは、日本語教師のみならず、日本語教育の政策研究を行う大学での授業、日本語教師を目指す学生の情報源などとして、幅広く活用されています。

■「JF日本語教育スタンダード2010」

および関連ウェブサイトの内容充実

日本語の教え方、学び方、学習成果の評価の仕方を考えるためのツールとして2010年3月末に発表した「JF日本語

教育スタンダード(以下、JFスタンダード)2010」の内容の充実と利便性の向上を目指して、さまざまな取り組みを実施しました。

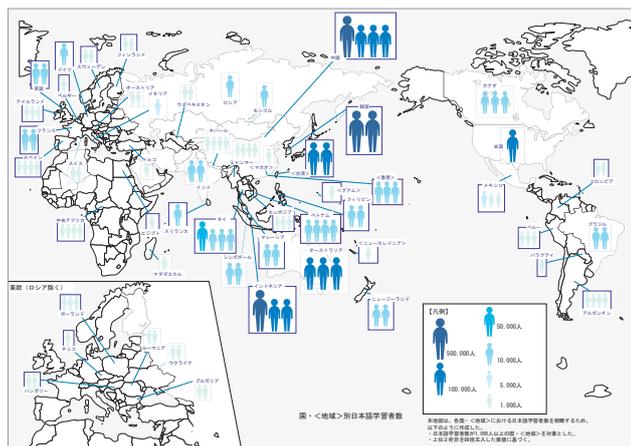
2010年7月には、冊子版『JF日本語教育スタンダード2010』と、JFスタンダードのより詳しい活用方法を収録した『JF日本語教育スタンダード2010 利用者ガイドブック』を刊行、また、同冊子のPDF版をJFスタンダードのウェブサイトに掲載し、無償でダウンロードができるようにしました。

「みんなの「Can-do」サイト」では「My Can-do」の作成や「Can-doフォルダ」の分析を可能にするなど、日本語教師や日本語学習者により実践的に活用してもらうための機能を充実。また、それらを活用した学習の参考となるよう、JFスタンダードのウェブサイトや「みんなの「Can-do」サイト」にて「JF Can-do」のA1およびB2レベルのコンテンツを重点的に追加しました。

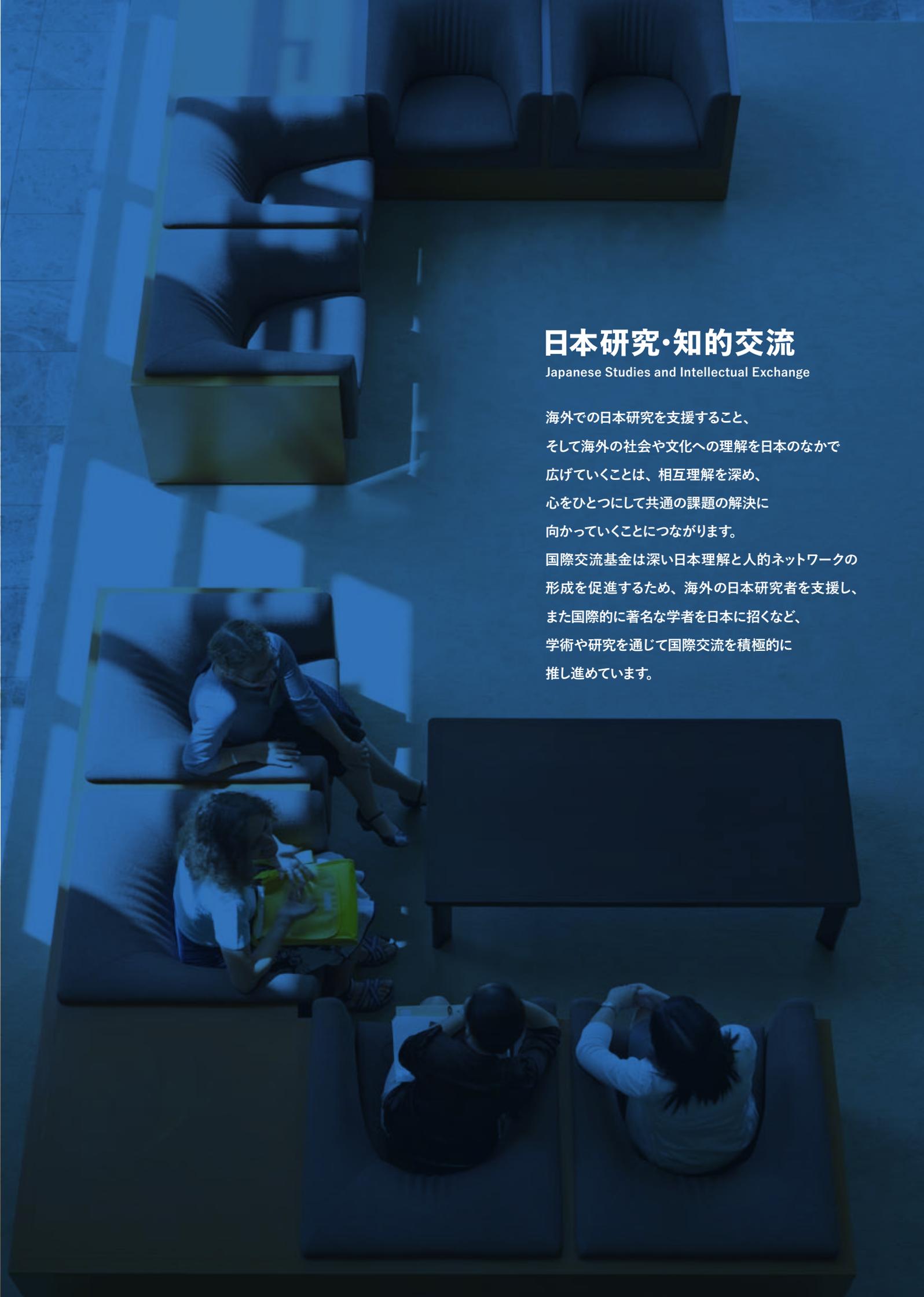
今後もJFスタンダードの普及を念頭に、紙媒体や電子媒体での情報提供およびウェブサイトの機能拡充を目指していきます。

■経済連携協定に基づく看護師・介護福祉士候補者の日本語教育

インドネシア、フィリピンと日本との二国間経済連携協定(EPA)により、2008年より、インドネシア人・フィリピン人看護師・介護福祉士候補者の日本への受け入れが始まりました。国際交流基金は、これらの候補者を対象とした来日前3カ月間の現地日本語予備教育事業を実施しました。候補者のほとんどは、この予備教育で、日本語に初めて触れる人たちです。月曜日から土曜日の毎日、たくさんの学習をこなさなければならない厳しい研修ですが、日本で働くという目標をもった彼らの意気込みと学習意欲は大変高く、互いに励ましあいながら元気に授業に臨んでいました。



【上】海外日本語教育機関調査をまとめた『海外の日本語教育の現状』
【左】国・〈地域〉別日本語学習者数



日本研究・知的交流

Japanese Studies and Intellectual Exchange

海外での日本研究を支援すること、
そして海外の社会や文化への理解を日本のなかで
広げていくことは、相互理解を深め、
心をひとつにして共通の課題の解決に
向かっていくことにつながります。

国際交流基金は深い日本理解と人的ネットワークの
形成を促進するため、海外の日本研究者を支援し、
また国際的に著名な学者を日本に招くなど、
学術や研究を通じて国際交流を積極的に
推し進めています。

日本研究・知的交流

Japanese Studies and Intellectual Exchange

海外における日本研究の促進

海外で行われる日本研究は、日本人や日本社会への理解を深めるだけでなく、それぞれの国と日本との良好な関係を維持するために重要です。日本を研究する人が活動を継続できる環境を構築するため、その国や地域において日本研究を担う中核的な機関への支援や、研究目的の来日の機会となるフェローシップ供与を行っています。また、研究者同士を結びつける機会を積極的に提供し、研究者間の交流の活性化をはかっています。

知的交流の促進

国際的な共通課題を理解し、その解決に向けて知的リーダーが国境を越えて取り組む場として、ワークショップや国際会議などを開催し、国際的な対話や研究を促進しています。また、さまざまな分野の有識者、専門家への訪日機会の提供や、多様な担い手が企画・実施する事業への支援を行っています。こうした知的交流を通じ、多層的、多角的な国際相互理解を推進することで、世界の発展と安定に向けた知的貢献をめざします。

ネットワーク強化

研究者間の緊密なネットワークを構築するため、国際会議やワークショップなど、対話を促進する場を企画しています。日本研究では、分野を越えた専門家同士の連携を促進するため、日本研究の国際会議を支援しています。また、海外の知日層との関係強化のための学会や、日本に留学経験のある日本研究者同士のネットワークづくり、国際会議の開催経費等、活動の一部を助成することでネットワークの多様化を推進しています。

フェローシップ

日本研究や知的交流の分野で優れた活動をする個人に対して助成を行います。日本研究の分野では、海外の研究者、博士論文執筆者、短期滞在研究者に対しフェローシップを供与しています。知的交流の分野では、海外の有識者・専門家に対し訪日機会を提供しています。また、日米のグローバルなパートナーシップを強化する観点から、研究者・ジャーナリストの研究・交流活動を支援する安倍フェローシップを実施しています。

機関支援

日本研究の分野において、各国で中核的な役割を担う大学や日本研究センターに対し、基盤を強化し、人材を育成するための支援をしています。研究や国際会議への支援のみならず、各機関のニーズに応じて教員拡充のための支援、客員教授の派遣、図書の拡充のための支援などを行っています。こうした包括的・継続的な支援により、世界中の日本研究機関の活動がより活性化するよう、事業を展開しています。

日米センター

[Center for Global Partnership]

日米センターは、日本と米国の人びとが世界の人とともに、グローバルな課題に取り組み、各界各層において対話し、交流するための共同プロジェクトを実施しています。国際会議、セミナー、ワークショップ、調査などを自ら実施するとともに、助成、フェローシップ供与、コーディネーターの派遣を通じて、研究の進展と国際的な課題解決を担う人材の育成に努めています。



1



3



2



4



5



6



7



9



8

1. JENESYS 東アジア大学院生日本研究特別招へいプログラムで来日した研修生 / 2. 日中韓文化交流フォーラム / 3. シンポジウム「多文化共生都市セミナー：2011年東京の多文化共生を考える」 / 4. 国際シンポジウム「ソーシャルファームを中心とした日本と欧州の連携」で発言する出席者 / 5. 「日亜交流シンポジウム——グローバリゼーションと文化的アイデンティティ～日本・アルゼンチン交流から考える～」のパネリスト達 / 6. 公開シンポジウム「中東の今と日本：私たちに何ができるか」の様子 / 7. 米国の小学校で活動するJOIプログラムコーディネーター [米国] / 8. 「第2回アチェの子供たちと創る演劇ワークショップ」に参加し、まちの人にインタビューする子ども達 [インドネシア・アチェ] / 9. マレーシア科学大学 (ペナン) での日本研究巡回セミナー [マレーシア・ペナン]

アジアにおける日本研究のネットワークにより密度の高い連携を

■東アジア日本研究フォーラム

日本に関する研究は、世界各国で盛んに行われていますが、近年では研究者、情報、研究資金等が国境を越えて移動する「日本研究者のグローバルゼーション」現象が顕著となっています。このような状況では、国際的な協力関係を築きながら、人材を育成し、共同研究や情報共有を行っていくことが重要です。

国際交流基金では、こうした認識のもと、世界各国における日本研究をめぐる現状と課題を把握しつつ、国・地域を越えた研究者間のネットワークの構築を目指す「世界日本研究者フォーラム2009」を2009年10月に開催しました。

同様の問題意識のもと、2010年度には、東アジアを拠点とする日本研究者の協力関係構築を目指して韓国日本学会が企画した「東アジア日本研究フォーラム」に対する支援を行いました。このフォーラムは、日本、中国、韓国から32名の研究者が集まり、2010年12月4、5日の2日間、韓国・済州島において開催されました。会議は、青木保特任教授（青山学院大学）による基調講演「ホーリスティック（全体論的）アプローチの有効性 国際日本研究の可能性」に始まり、上垣外憲一教授（大手前大学）による特別講座講演「文化交流史と日本研究」をはさみつつ、「日本文学（東アジアの21世紀の日本文学研究）」、「日本文化（東アジアの文化交流と相互認識）」、「国際関係（日本外交と東アジア）」、「日本語と日本研究（今後の日本語研究と日本研究）」の4セッションにおいて、活発に発表と討議が行われました。

会議では、日本研究に関する国際的な協力と、日本研究を媒介とした東アジアの知的ネットワークの構築の重要性が確認され、次回は日本で第2回のフォーラムを開催することが話し合われました。



[上] 東アジア日本研究フォーラムの予稿集
[右] 2010年10月、北京で開催されたシンポジウム

■北京日本学研究中心

数多くの日本語教師、日本研究者を輩出してきた北京日本学研究中心の設立25周年と、センターの前身である「北京日本語教師培训班（通称：大平学校）」の設立30周年を記念して、2010年10月に国際シンポジウムを北京で共催しました。

2日間にわたったシンポジウムでは、「世界における日本学研究的趨勢と連携——次世代研究者への継承」と題するフォーラムと、4つのテーマに応じた分科会から構成され、初日には日本、中国、韓国、米国、フランス、イギリス等の国や地域から約200人の日本研究者が集まりました。

初日のフォーラムで実施した基調講演・パネルディスカッションと、翌日の分科会での発表により、参加者は世界における日本研究の現状と今後の課題について情報と意見を交換するとともに、各人の研究に関する知見を共有しました。

また、開催日程のなかには「第6回大平正芳記念財団優秀学位論文授賞式」「第3回中国日本学研究会カシオ杯優秀修士論文授賞式」「第1回全国日本学研究会博士フォーラム」といったイベントも組み込まれ、大勢の日本研究者の「卵たち」が日頃の研究成果を披露しました。これらの賞や発表会は次世代を担う中国の若手研究者が研究を継続する励みとなっており、研究分野の広がりや内容のレベル向上を実感する良い機会となりました。

2010年9月以降、日中関係の悪化の影響で開催を見合わせた会合もあるなかで、このシンポジウムが予定どおり実施されたことは、1979年に大平正芳首相（当時）と華国鋒主席（当時）の合意で設立された北京日本学研究中心の「日中共同事業」の精神が現在も脈々と受け継がれていることを示しています。



日本を研究する海外の専門家に 調査の機会を提供

日本研究フェローシッププログラムでは、日本に関わる研究を行う海外の学者・研究者を日本に招へいし、日本での研究や調査、国内の専門家との人的ネットワーク構築などを促進するものです。ここでは、2010年度フェローとして、米国から来日した文化人類学者ショーン・ベンダー氏から寄せられた手記を紹介합니다。

日本滞在中の研究体験

ショーン・ベンダー

テクノロジーと社会の結びつきに関心をもつ文化人類学者として、私は社会的ロボット、サービス・ロボットのほか、体に装着して筋力を補う動作支援ロボットの分野で世界のトップクラスである日本に強く惹かれていましたが、そのなかでいくつかの疑問が浮かんでいました。こうした装置の実用化はどれほど進んでいるのか？

装置はどのような環境に組み込まれているのか、また、人びとの反応はどうか？ 私は2010年から2011年にかけて、国際交流基金の日本研究フェローシップの支援を受けて、日本のロボット研究者への民族誌学的調査を実施し、これらの疑問の検証に乗り出しました。

私はかねてより、ロボットが一部の高齢者介護施設での療養にどう利用されているのか強い関心を抱いていました。しかし、ロボット工学の研究者に接触はしたものの、調査に適した現場を見つけるのに苦労しました。ところが、私と国際交流基金とのつながりは思わぬ幸運を呼びました。日本研究フェローのために開かれたパーティーで、私はひとりのスタッフに自分の計画と研究テーマを話しました。すると1カ月後、あるロボット研究者から、実際にロボットが使われている現場に案内するというメールを受け取りました。それは、まさに私が関心を寄せていた現場でした。後で聞いた話によると、この研究者は、ドイツで開かれた高齢化社会におけるロボット工学に関する日独合同会議のパネルの出席者でした。会議は国際交流基金が一部支援し、私がレセプションで話をしたスタッフもその会議の場に居合わせていました。スタッフから私の研究テーマを聞いたこの研究者は、親切にも私に連絡をとってくれたのです。

偶然が重なったこの思いがけない出会いに、「少子高齢化問題の解決」という世界共通の関心事が重なり、私は日本滞在中、研究者たちと非常に有意義な関係を構築することができました。私が調査を始めたロボット研究グループは、メンバー全員が日本の大手企業でエンジニアとしてキャリアを重ね、現在は関東地方の各大学で教鞭をとっていました。高齢者施設の入居者の心理的ストレスの緩和に自分たちの専門知識が生かせないかと考えていた彼らは、10年ほど前、「ロボット・セラピー・グループ」を設立しました。このグループは、同じく癒やしを目的にペット（主に犬）を利用した別の組織から発展したものでした。

このグループが使用しているロボットの多くは本物の動物にそっ

くりで、すべて日本製です。この中に、現在は産業技術総合研究所(AIST)に所属している技術者が発明した「パロ」というロボットがあります。パロは、アザラシの子どもとほぼ同じ大きさで、見た目も動きもアザラシそっくりです。白い毛の中にあるセンサーがロボット内部の超小型コンピュータと接続しており、センサー情報はそこで処理されるため、パロは接触、会話、動きに反応することができます。長年の研究データに基づき、パロは相手に合わせて反応するようプログラムされており、言葉も一部理解できます。グループはその他に「AIBO」も使っています。AIBOはソニーが開発し、2006年まで販売されていた小型犬形のロボットです。パロと同じく、AIBOも体表面に一連のセンサーを搭載しており、接触や音に反応することができます。パロと違うのは、AIBOの外見は光沢があっても機械に見え、利用者によるプログラムが可能で、無線で制御できる点です。生来の職人であるエンジニアたちは、自分たちのニーズや目的に簡単に合わせるができるAIBOのシステムを高く評価していました。

セラピー目的のロボット使用はまだかなり新しい試みであり、どのような使い方が最も有効かは完全には分かっていません。研究と実用の線引きは極めてあいまいです。しかし、はっきりしているのは、日本の多くの人びとが、将来の高齢化社会に対処するうえでこうした装置が成功の決め手になると考えている点です。さらに、上述の日独合同会議が指摘しているように、関心は日本にとどまりません。AIBOの生産は終了しましたが、たとえば、パロは先ごろ米国で使用が認められたほか、欧州数カ国でも高い人気です。日本が開発した他のロボット技術にも海外進出の動きが見られます。私はこれからも、日本と海外での日本製ロボットの開発と実用化の動きを追跡調査していくつもりです。そして、この胸躍る知的好奇心の旅のきっかけを与えてくださった国際交流基金に対し、深く感謝しています。



ショーン・ベンダー氏

「くらしやすい社会とは？」 世界共通の課題に専門家たちが意見交換

■インターカルチュラル・シティ・プログラム

国籍、障がいの有無に関わらず、一人ひとりが生きがいをもてる社会を目指して、「社会的包摂（ソーシャル・インクルージョン）」をテーマとした事業を実施しています。

日本における外国人住民の割合は約1.7%、東京都は約2.7%、そして国際交流基金本部が所在する東京都新宿区では約11%にのぼります。増え続ける外国人住民は地域にとって「脅威」なのでしょうか、それとも「チャンス」なのでしょうか。もともと居る住民と、新しくやってきた外国人住民が顔を合わせ、意見を交わす機会を積極的につくりだしていく。もちろんそこには摩擦も生まれますが、新しい取引先、新しい企業、新しいアートが生まれ、街が活性化する可能性もあります。多様な従業員を登用しイノベーションと成長を目指す企業のように、外国人住民をはじめとする地域の住民の多様性をチャンスと捉え、都市のダイナミズム、革新、創造、成長の源泉とする政策を掲げる都市を欧州では「インターカルチュラル・シティ」とよびます。

欧州評議会が中心となって進めているこの「インターカルチュラル・シティ・プログラム」には、その趣旨に賛同する欧州21都市が参加し、お互いの知見・経験を交換しています。2010年10月、国際交流基金では、西川太郎氏（荒川区区長）を団長とする日本の実務家・研究者・ジャーナリストからなる代表団をスイスとイタリアに派遣し、調査と関係者との意見交換を行いました。2011年1月に東京で開催されたセミナーでは、調査の報告を行うとともに、多文化共生に熱心に取り組まれている新宿区、大田区から区長・副区長を招き、欧州の取り組みを参考としながら、日本の自治体での多文化共生の取り組みの現状と今後の課題を探りました。100名以上の熱心な聴衆の参加を得たことに手ごたえを感じ、次年度も事業の発展・継続を決定しました。



■ソーシャル・ファームの地平

2010年に「社会的包摂」をテーマとして実施されたもうひとつの事業は、ソーシャル・ファームに関する国際会議でした。ソーシャル・ファームとは、社会的企業のひとつであり、障がい者など、機会の限られた人びとの雇用を目的としながらも、一般の市場で活動する企業を指します。「障がい者を保護」するのではなく、「障がい者とともに」事業をつくり・経営していくソーシャル・ファームは、世界的に広がりを見せており、日本においても、ソーシャル・ファーム・ジャパンが設立されるなど、障がい者の雇用に対する新しい取り組みがはじまっています。

国際交流基金は、2011年1月、国際シンポジウム「ソーシャル・ファームを中心とした日本と欧州の連携」を実施。北欧を中心とする欧州の専門家と日本の専門家がソーシャル・ファーム発展のための具体的な方策と今後の日欧の連携の可能性について議論を交わしました。欧州の専門家は、シンポジウムの前に関西・四国を訪問、障がい者やホームレスの雇用を目的とするソーシャル・ファームや非営利団体、過疎地域の活性化を目指す社会的企業の運営者と出会い、現場を見る機会も得ました。

日本と欧州、さらに欧州域内の国々の間でも、外国人の受け入れや障がい者の雇用、それをめぐる状況や法制度、支援制度等は異なり、コミュニティのあり方もソーシャル・ファーム自体のあり方も多様です。

とはいえ、国際交流基金として、このような事業を通し、互いの成功や失敗から学びあい、誰もが生き生きと暮らせる社会の実現という同じ目標を持つ「仲間」として、国内のみならず国際的ネットワークを形成にむけて活動を続けています。



[上] ソーシャル・ファームに関するシンポジウムの出席者のひとり、デンマーク・ソーシャルエコノミー・センター所長のラルス・レネ・ベネルセン氏
[左] インターカルチュラル・シティ・プログラム調査報告会で発言する、中山弘子新宿区副区長

草の根交流活動を通してひろがる 日本への支援の輪

日本食やアニメがすっかり日常に溶け込んだ米国でも、中西部や南部ではまだまだ日本との交流の機会は限られています。日米センターは、こうした地域で日本への関心を広め、対日理解を深めることを目指して、日本文化を紹介し、地域の人びととの交流の輪を広げるコーディネーターを派遣する「日米草の根交流コーディネーター派遣プログラム (Japan Outreach Initiative : JOI)」を実施しています。

それぞれの地域で交流活動の拠点となる日米協会や、大学などに派遣されるコーディネーターは、派遣地域の小学校から大学までの教育機関や図書館、コミュニティセンターなどを訪れて、日本人の生活や伝統芸能など日本の幅広い文化を、工夫をこらして紹介します。そうした活動を通して草の根交流の担い手となる日本の人材を育成するのも本事業のねらいです。2010年度は新たにバルパライソ大学 (インディアナ州)、アイオワ大学 (アイオワ州)、ミネソタ日米協会 (ミネソタ州)、インターナショナル・インスティテュート・オブ・ウィスコンシン (ウィスコンシン州) の4カ所に、1名ずつが派遣されました。

コーディネーター達自身、2011年3月11日の東日本大震災のあと、日頃の地道な活動によって日本に親近感や関心を抱く人びとが確実に増えていることを改めて実感したと言います。道で行き交う人びとが「あなたの家族は大丈夫なの?」「日本のために私にできることはある?」と、遠く離れた日本の被災者を思いやり、コーディネーターに次つぎと声をかけてくれたそうです。少しずつネットワークを広げ、地元でもその存在を知られるようになっていたコーディネーターには、メディアからの取材依頼も舞い込み、

日本における自然災害の実情や防災教育のあり方、災害時の日本人の様子といったテーマについてまで情報発信することになりました。

また、コーディネーター達が地域の人びととの交流を深めるなかで、震災復興支援イベントや募金活動が各地で生まれました。ウェブスター大学 (ミズーリ州) では、日本人学生会が主催し、「Hope For Japan」という支援イベントを立ち上げ、フリーマーケットや和太鼓公演、震災について考えるシンポジウムを行いました。コーディネーターも協力し、約1カ月で150万円ほどが集まりました。また、ウェスタン・ミシガン大学 (ミシガン州) では、巻き寿司をともに食べながら被災地の映像を見て日本を支援するイベントを実施し、\$2,257ドルが集まりました。

アーカンソー大学フォートスミス校 (アーカンソー州) では、被災地の学生を対象とした奨学金が新たに設立されました。親や家を失い、家族の生活基盤が失われた学生にとって、学業への復帰は二の次になりがちです。そのような境遇に置かれた被災地の学生に、安心して勉強できる機会と環境を提供したいという大学当局や地元企業、地域コミュニティなど、各方面の募金や協力を得て、宮城県の前学生2名を約8カ月間受け入れることが決定しました。コーディネーターが地域の人びとと協力しながら活動に取り組むなかで、被災者への思いやりが自然に生まれ、地域が一体となって日本を支援することにつながったのです。

JOIの事業は、こうした体験が共有した多くの人の心に残るだけでなく、参加したコーディネーター達の今後の糧にもなるものと信じています。



[上] 震災復興を祈って折り鶴をつくる (オハイオ州フィンドレー大学)
[左] 小学校で活動するJOIプログラムのコーディネーター

情報提供／国内連携

国際交流基金は主な3つの分野での事業のほかに、国内外の国際文化交流についての情報提供や、企業と連携した事業展開、国際交流について大学と共同研究を行っています。ここではそれらの活動について、そして京都支部の活動を報告します。



JFIC ラウンジ

撮影：増田智泰

情報センター

ウェブマガジン「をちこちMagazine」と情報提供イベントを開始

情報センターは、プレスリリースなどを発信する広報・メディアアリレーション業務を担うほか、国際文化交流についてのトピックを提供するウェブマガジン「をちこちMagazine」や年次報告書の発行、ウェブサイト、ブログ、ツイッター、メールマガジンなどによる情報発信、国内連携事業、国際交流基金賞や地球市民賞などの顕彰事業（P.8参照）、ライブラリーとイベントスペースで構成される情報発信拠点「JFIC (Japan Foundation Information Center) 通称：ジェイフィック」の運営、大学生などの本部への見学・訪問受入れも担っています。

日本で唯一の国際文化交流専門誌『をちこち（遠近）』を受け継ぎ、2010年8月にはウェブマガジン「をちこちMagazine」が公開されました。毎月企画される特集記事のほか、ウェブサイト上のさまざまな報告記事やリソースが集まる読みもののポータルサイトとしての機能と、2004年から2009年までに発行された『をちこち』記事のデジタルアーカイブ機能を兼ね備えています。2010年は「これからの国際文化交流」「越境する文学」「音楽が紡ぐ出会い 日本×アフリカ」「表現としてのマンガ」「今を生きる文化遺産」「日本映画に魅せられた世界の映画人」「世界がであうBUTOH」といった特集を毎月掲載しました。

また、JFICを活用したイベントをあらたに開始しました。在京大使館の文化担当官を対象に日本の文化環境について情報提供を行った「カルチュラル・ミーティング・ポイント」、ギタリストの大萩康司氏と荘村清志氏を迎えてのトークセッション&ミニライブ「ギタリストが見る／見た世界」、若手アーティストを対象とした「AIR! AIR! AIR! 海外でステップアップを目指せ」など幅



[左] 大萩康司氏(左)と荘村清志氏による派遣報告会

[右] ウェブマガジン「をちこちMagazine」 <http://www.wochikochi.jp/>

広い対象へ向けたイベントを実施しました。

また、国内連携事業として、日本のアーティスト・イン・レジデンスに関する情報を総合的に発信するウェブサイト「AIR_」のリニューアルを記念し、ミニフォーラム「アーティスト・イン・レジデンスと都市の創造拠点」を実施しました。

JFサポーターズクラブは2009年度に募集を終了しましたが、1月末のサポーターズクラブ制度終了までの間、会員および一般の方を対象に、メールマガジン「JFナビゲーター」の配信や、「サポーターズクラブ通信」を発行するとともに、トークショー「日本映画の巨匠・木下恵介と中国」、ロシア・キルギス・ウズベキスタンへ派遣された切り絵作家の報告会とワークショップ「切り紙と見た景色」など、計5回のイベントを実施しました。

JFICライブラリーでは、所蔵する貴重本などを紹介するミニ展示を行いました。2010年6月から9月までは、「明治・大正時代の日本ガイドブック」、2010年10月から2011年1月までは「明治時代の写真集」というテーマで毎月資料を展示し、来訪者が当館所蔵の貴重本に触れる機会を提供しました。

デザインを通じて海外の若者と日本の交流を促進

事業開発戦略室は、2010年度、日本と韓国の未来を担う若者のより深い交流を目的として、「日韓学生パッケージデザイン交流プロジェクト（通称：ハッピー・キューブ・アワード）」を実施しました。この事業は日本パッケージデザイン協会、韓国パッケージデザイン協会、ロッテ、大日本印刷をはじめとする団体、企業、個人の協力により開催され、日韓のデザインを学ぶ学生を対象に、「菓子」「飲料」「化粧品・トイレタリー」の3部門でデザインを公募、入賞作品の展示会を日韓両国で開催、さらにデザインフォーラムや韓国人学生を日本へ招いての研修を行うものでした。コンテストには日韓合わせ560作品の応募があるなど反響も大きく、日韓の学生が企業やプロのデザイナーと交流するなどのプログラムの結果、「プロに認められたことが自信に繋がった」「日本と韓国のデザインの相違点などが理解できた」等のコメントが寄せられました。この事業で築いたつながりを継続するために、2011年度にはフォローアップ事業を実施の予定です。

また、2009年度に続き「第2回学生のための国際ふろしきデザインコンテスト」を実施しました。「自国と日本の融合」をテーマに、海外9ヵ国（ドイツ、インドネシア、オーストラリア、カナダ、米国、ブラジル、ロシア、ベトナム、シンガポール）から応募があり、最優秀



「日韓学生パッケージデザインコンテスト」の入賞作品展示会

賞および優秀賞に選ばれた計4点のデザインは国際交流基金広報グッズ「JFオリジナルふろしき」として製品化されました。この複数国を対象としたコンテストとは別に、2010年がトルコにおける日本年であったことから、「トルコ・日本の学生によるふろしきデザインコンテスト」も実施。「トルコと日本の融合」をテーマとし、応募作品のなかから最優秀賞および優秀賞の2作品を製品化しました。

事業開発戦略室はこれら事業のほか、海外における日系企業の社会貢献活動を通じた国際文化交流の推進を行っています。2010年度には、前年度に実施した中国およびベトナムでの日系企業の社会貢献活動の調査報告書を作成しました。

国際交流共同研究センター

セミナー・シンポジウムで研究成果を発信

国際交流共同研究センター (Joint Research Institute for International Peace and Culture) は、国際交流についての研究、活動の分析・評価ならびに国際交流技法の開発などの研究を実施し、その研究成果を広く社会に還元することにより国際交流の発展に寄与するために、国際交流基金が青山学院大学と連携・協力して運営しています。

2010年度には、「平和のための文化イニシアティブ」および「国際文化交流機関の比較研究」に関するシンポジウムなどを開催し、研究紀要『Peace and Culture』第3巻第1号を発行しました。



ニューヨーク日本文化センターにて開催された「平和と文化に関するラウンドテーブル」
国際交流共同研究センター → <http://www.jripec-aoyama.jp/>

京都支部

多様な担い手との連携による日本文化の発信

京都支部は、関西圏のさまざまな国際交流の担い手とのネットワークを活かしつつ、海外からの留学生・研究者など外国人を対象とした日本文化紹介活動を推進しています。

和菓子の手づくり体験や、酒造りの工程見学、錦織物の工房訪問などの体験型プログラムや、能・狂言等の舞台公演、日本映画の上映会など外国語解説付きのプログラムを通して、日本文化に触れる機会を外国の人たちに提供しています。「国際交流のタベ——能と狂言の会」は1974年から実施し、2010年度で第37回目を迎え、会場は約380名の来場者で埋め尽くされました。

また、国際交流基金が招へいする日本研究者による講演会、セミナー、懇談会などを通じて、国際交流に関心をもつ市民と

の対話や交流を進めています。2010年度のフェロー講演会では、マリーナ・コワルチュク氏（ロシア）による「日清戦争期のロシアの新聞における日本観の特徴」についての講演会等を実施しました。



狂言「素袍落」茂山千五郎師
2点とも撮影：高橋章夫



能「船弁慶」片山九郎右衛門師

国・地域別の取り組みと海外拠点の活動

国際交流基金では、政府の外交活動や国際情勢の変化を踏まえながら、国・地域別方針を策定しつつ事業を実施しています。また、21カ国に22の拠点を設けており、その国・地域の状況に合わせ、文化芸術から日本語教育、日本研究や知的交流の各分野でさまざまな交流活動を展開しています。



「日韓新時代：未来へのコラボレーション」の一環として韓国のメディアアーティストが共同制作した「ソウルスクウェア・メディアキャンパス」における真鍋大度氏の映像作品

2010年度 国・地域別の取り組みについて

2010年度においては、韓国における主要都市向け戦略的文化集中発信プロジェクト、アジア・大洋州地域との人物交流を促進する21世紀東アジア青少年大交流計画(JENESYS Programme)、「日墨交流400周年」「トルコにおける日本年」をはじめとする大型周年事業への協力などの重点的事業を展開しました。

■主要都市向け戦略的文化集中発信プロジェクト

日本との外交関係上重要な国の主要都市で、現地の文化芸術機関等と協力しながら文化発信事業を集中的に展開し、日本人および現代日本社会のもつ価値や魅力を示し、対日理解の向上、深化をはかるプロジェクトです。2010年度は韓国で「日韓新時代：未来へのコラボレーション」を実施しました(P.15、P.35参照)。

■21世紀東アジア青少年大交流計画(JENESYS Programme)
「21世紀東アジア青少年大交流計画プログラム(JENESYS Programme)」は、アジアの強固な連帯の基礎を強化するこ

とを目的として、2007年からの5年間で大規模な青少年交流事業を実施する事業です。対象はEAS(東アジア首脳会議)参加国(ASEAN、中国、韓国、インド、豪州、ニュージーランド)を中心とするアジア・大洋州の諸国。国際交流基金はこの事業の一翼を担い、2010年度は日本語教師や日本語学習者の招へい、若手知識人や実務家、若手の芸術家・デザイナーの招へい事業など、将来、各分野でリーダーとしての活躍が期待される人材の育成をめざした交流事業を行いました。

■大型周年事業への協力

2009年から2010年にかけて「日本メキシコ交流400周年」が、2010年には「トルコにおける日本年」が開催され、官民を挙げて数多くの文化交流事業が行われました。国際交流基金はこれらの周年事業に積極的に参加し幅広く日本文化を紹介しました。

韓国の6都市を舞台に展開された 「日韓新時代：未来へのコラボレーション」

ソウル日本文化センターでは、文化を通じた新しい日韓関係の構築を目指して、展示、公演、映画、青少年教育、シンポジウムなど複合的なイベント「日韓新時代：未来へのコラボレーション」事業を、在大韓民国大使館との共催で2011年2月から3月、ソウルなど6都市で実施しました。

今回の企画は、日韓のさまざまな人びと・機関による共同作業や、伝統と現代、自然と科学技術、多文化共生、環境といった日韓共通課題の克服に向けた双方の取り組みに目を向け、各事業は両国の専門家や機関が連携・協力して実施されました。短期間に多くの事業を実施し、多くの来場者や共催団体の人びとと関わることができました。

■美術では、2000年以降の日本のマンガを主題とする「新次元マンガ表現の現在」展や、日本のプロダクト・デザインを多角的に概観する「WA：現代日本の調和の精神」展、ソウル中心部の巨大なビルの外壁に日韓メディアアーティストの共同制作作品が浮き上がる「ソウルスクウェア・メディアキャンパス・J-Kコラ



廃品打楽器演奏グループ「ティコボ」のライブ

ボレーション」など、同時代的で多彩な表現を紹介しました。舞台芸術では、伝統音楽分野で初の本格的な日韓コラボレーションとなった「日韓伝統歌舞楽祭」、在日の家族が逞しく生きる姿を描いた演劇「焼肉ドラゴン」公演、日韓の廃品打楽器演奏グループの協演が実現した「ティコボ韓国巡回公演」などを実施。映画の分野でも「われわれ！日韓映画祭」と題して日韓に関係の深い多様な映画を上映して新たな視点を提供しました。

さらに、日韓の大学生が共同で模擬会社を立ち上げ音楽イベントを行う、あらたなタイプの教育事業「日韓ブラストビート・プロジェクト」に加え、日韓の小説の互いの国での翻訳・出版状況を掘り下げた出版交流シンポジウムなど、文化のさまざまな様相を映し出す企画も実現しました。

事業期間中の3月11日に東日本大震災が発生しましたが、各イベントでは韓国の多くの人びとから被災者に対し温かい声援と支援が寄せられ、この事業が目指すものと、韓国の人びとの日本に対する眼差しが重なっていることが感じられました。

パリ中心部の立地とホール施設を活用し 日本文化発信事業を実施

展示や講演会のほか、16万人の集客があるイベント「JAPAN EXPO」へのブース出展など行いました。

■2010年は、秋のハイライト事業として「近代日本工芸1900-1930—伝統と変革のはざまに」展を開催。明治、大正、昭和という3つの時代に渡る1900年から1930年の間に制作された優品74点を、陶芸、染織、漆工、金工を中心に紹介。この時代の工芸作品が海外でまとめて紹介される貴重な機会となりました。また、アングレーム国際漫画フェスティバルとの協力により、『ベルサイユのばら』作者の池田理代子氏を招へいして講演会を行い、たくさんの若い世代が来場しました。

大ホールでは、日本のコンテンポラリーダンスを代表するカンパニー Noism を招へいし、「Nina」公演を実施。3日間の公演はいずれも満席で、終演後は観客からの熱狂的なカーテンコールを受けました。他にも、津軽三味線の上妻宏光氏とジャズピアノの塩谷哲氏による異色デュオ AGA-SHIQ のコンサート、梅田宏明氏によるコンテンポラリーダンス公演などを実施しました。



パリ日本文化会館「近代日本工芸 1900-1930 伝統と変革のはざまに」展
Les arts decoratifs japonais face a la modernite / 1900-1930 撮影：C.-O. Meylan

2010年は映画事業を充実させた1年でもありました。年間8本の特集上映会を企画し、特に小栗康平監督特集、島津保次郎監督特集のふたつの特集はフランスで初の試みであり好評を得ました。また、国文学研究資料館の今西祐一郎館長による源氏物語に関する講演会、作家の夢枕獏氏によるトーク、渋沢・クロード賞の受賞者によるレクチャーなどを実施しました。

■パリ日本文化会館の活動は館内のみに留まりません。2010年は、日本のエンターテインメントの祭典として16万人以上の来場者を集める「第11回 JAPAN EXPO」展に、初めてブース出展しました。国際交流基金が開発した日本語学習サイトの紹介を中心に、日本語学習の魅力を発信しました。

■講演・シンポジウムでユニークな企画だったのは、「新幹線とTGVが存在しなかったら…高速鉄道がもたらす経済効果と社会的影響」と題されたシンポジウム。JRとSNCF（フランス国鉄）の関係者が集い、鉄道技術開発における共通点と相違点を浮き彫りにする機会となりました。

過去から未来へと続く 日本文化を 多角度から紹介



ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展の総合ディレクター、妹島和世氏の講演会

現代に受け継がれ、生み出されて行く日本文化を多様な切り口で紹介し、注目度の高いイベントを展開しました。

■松竹大歌舞伎ローマ公演を控えた中村芝雀文氏による歌舞伎講演会では、伝統芸能への根強い人気を反映し多くの聴衆が来場したほか、ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展で初の女性総合ディレクターとなった妹島和世氏を招いた講演会では超満員の観客が熱心に耳を傾けました。その他、三味線とピアノのデュオAGA-SHIO、ユニットSalle Gaveauなどの公演や、増村保造監督特集などの映画上映、「キャラクター大国、ニッポン」展など多彩な事業を展開しました。

■日本語講座では、平日午前に入門コースを、またドラマやマンガなどテーマ毎に日本語に親しむ「楽しく学ぶ日本語・日本文化短期コース」を新設。日本人ボランティアと学習者の会話会「わいわい・しゃべりあーも」も恒例となり、開催は10回を数えました。日本語能力試験はローマ、ミラノのほか新たにヴェネチアでも開催され、711名が新試験に臨みました。

万博会場ほか 中国各地で 多彩なイベントを展開



「J-pop in China2011」より、日本の男性R&Bシンガー、JAY'EDのライブ

本年度は北京、上海のみならず、地方都市でも積極的に事業を展開しました。

■万博に沸く上海で、アニメキャラクターと建築に関する2つの展覧会や邦楽公演、ドキュメンタリー映画祭への作品出品を行ったほか、北京・青島では『世界の中心で愛をさけぶ』の著者である片山恭一氏の講演会を、また南京ではamin氏、河口恭吾氏、城南海氏による「心連心コンサート」を実施しました。さらに、7月の中国人個人観光ビザ発給拡大を踏まえ、日本の多様な地方文化を紹介する目的で、地方自治体事務所等の協力を得て、「都道府県紹介講演会シリーズ」を実施。現地を熟知した自治体職員による実演を交えた講演は一般市民のあいだで大好評でした。

■7月に新試験が始まった日本語能力試験で、中国では出願者数が28万人を超えました。また全国の高校、大学の日本語教師を対象にした集中研修会を北京、上海、貴陽などで開催し、330人以上が参加しました。

出版の街ライブチヒで 日本のブックデザイン を紹介



日本の優れたデザインの書籍に見入る来場者

本年度も多くの事業を行いました。なかでもライブチヒで開催した「現代日本ブックデザイン」展は好評を博しました。

■ライブチヒは国際図書見本市が有名で、「文庫本」のフォーマットはライブチヒの「レクラム文庫」から発展したといわれる出版の街。同地の印刷博物館で開催された「現代日本ブックデザイン」展では、文学、実用書、マンガ/ポップカルチャーなどの8分野の優れた装丁の本100点を展示しました。オープニングは雨にもかかわらず200人近い人が集まりました。外国での書籍展というと「言葉が前提だから」と敬遠されがちですが、日本のブックデザインや高度な印刷技術は賛嘆的でした。また、書道のデモンストレーションや子どもから大人まで楽しめる日本の活版印刷体験ワークショップなどのイベントも盛り上がりしました。今回、いわゆる「日本好き」ではないタイプの来場者も多く、今後も日本文化を新たな切り口で紹介することで、これまで日本に関心のない人にも日本文化に触れてもらえるよう努めていきたいと思っています。

日本とインドネシアの 戯曲競演で 文化交流の意義を探る



日本の作家による戯曲がインドネシアの俳優によってリーディング上演された

インドネシア社会が抱えるさまざまな問題に対して、日本とインドネシアの劇作家の戯曲を競演することで文化のもつ力や意義を再考する場を提供しました。

■2010年11月「インドネシアのリアリズム演劇を見直す」をテーマに、インドネシア・ドラマティック・リーディング・フェスティバルがジャカルタ日本文化センターのホールで開催されました。これは2009年12月に東京で開催された「アジア劇作家会議09」に参加したジョネッド・スリャトモコ氏が、同会議の果たす役割・機能に感銘を受け、インドネシアの代表的な劇団に参加を呼びかけて実現したもので、坂手洋二『屋根裏』、鄭義信『杏仁豆腐のココロ』(以上、日本)、ラエタ・プリゾン・ブコイ『ドクター・レスレクション：町を治療します』(フィリピン)の3作品が初めてインドネシア語でリーディング上演されたほか、インドネシア語戯曲も古典と新作あわせて3本が上演されました。また、インドネシアの演劇関係者が一堂に会してのディスカッションも行われ、日本からは坂手洋二氏が参加しました。

アジア・大洋州 | **バンコク日本文化センター**

タイ国内の映画祭に 5千名を集客 周辺国でも 日本文化を紹介



黒澤明監督生誕100周年記念映画祭でのトークイベント

文化芸術面の交流をはじめ各種イベントを開催しました。

■「黒澤明監督生誕100周年記念映画祭」では、25作品を一挙上映しました。メディアにも大きく取り上げられ、約5千名の来場者が巨匠の作品に触れました。また「現代日本の工芸」展や、現代演劇公演、タイボグラフィー国際シンポジウム等を通じて、先鋭的で「カッコいい」日本のイメージ発信に努めました。日本文化紹介事業の比較的少ない地域にも力を入れ、東北部、南部で和楽器演奏、映画上映、折り紙事業をシリーズ化したほか、隣接するラオス、カンボジアでは生け花を紹介し、ミャンマーではパントマイム公演で1,500人を超える観客を笑いの渦に巻き込みました。

■日本語教育では、中学・高校生を対象としたオリジナル教材『こはるといっしょに ひらがなわあーい』を出版しました。

■チェンマイで開催した「第4回タイ国日本研究ネットワーク年次総会」では、応募論文、発表論文、参加者のすべてが過去最多に。また、「地元学」をテーマとしたセミナー等も実施しました。

アジア・大洋州 | **クアラルンプール日本文化センター**

在マレーシア日本人 との日本語を通じた 交流活性化の試み開始



マレーシアの日本語教師のためのセミナー

マレーシアでの拠点設置から20年以上が経過し、引き続き文化交流を活性化させ、日本理解と対日関心向上を図っています。

■伝統文化から現代文化、生活文化まで多様な事業を展開。都市部に限らず地方でも事業展開をはかりました。「和太鼓倭公演」では収容人数を大幅に超える2,800名を動員。「吉田兄弟ライブ」は全公演完売、メディアの取り上げも大きく話題となりました。また、招へい事業で訪日した若手クリエイターの活動成果展をショッピングモールで実施。多数の市民の目に触れました。

■マレーシアでは定年退職後に長期滞在する日本人が増加していますが、こうした人達とマレーシア人との交流促進と日本語教育の裾野拡大の両方を目指し、日本人向け日本語教授法入門講座を開講しました。また中等教育における日本語教育の拡大に対応し、各種支援や、日本語講座の拡充なども実施しました。

■研究者のネットワーク強化を図り、北東アジアの経済連携とASEANへの影響をテーマに実施したセミナーでは、日本人専門家を迎え、国内3カ所を巡回、500人以上が参加しました。

アジア・大洋州 | **マニラ日本文化センター**

高校生向けの 新しい日本語教材 『enTree』開発



日本語教育促進のためのイベント「2011 NIHONGO FIESTA」

フィリピン教育省は、2009年に日本語を含む外国語を選択科目として高校のカリキュラムに導入する試みを開始。マニラ日本文化センターはこの動きに合わせた日本語教育事業を展開しました。

■日本語学習をきっかけに、異なる言語や文化に対する好奇心を養い、コミュニケーション能力、問題解決能力といった自己実現力を育むことに重点を置いた教材『enTree - Halina! Be a NIHONGOJIN!!』を開発しました。この教材は、世界中で日本語を学ぶ同世代の若者と交流するための日本語や、日本や世界の国ぐにの文化を学びながら、それらの国と、フィリピンとの共通点や相違点を考えることで、異文化への理解やフィリピンの価値を再発見できるよう方向づけられています。教材を手にしたマニラ市にあるトレス高校のエドワード・タン先生は「子どもたちに文化的に寛容であることの大切さを教えることができる。自分なりにアレンジして教えていきたい」と感想を寄せてくれました。今後フィリピン各地の高校に日本語の輪が広がることを期待しています。

アジア・大洋州 | **ニューデリー日本文化センター**

コンテンポラリーな 表現から 日本への関心を喚起



ダンサー田中泯氏によるパフォーマンス

舞踊が盛んなインドでダンスパフォーマンスを通じた交流を行いました。インドでは欧米諸国の最新情報が届きやすい一方、日本の現代的な文化表現に触れる機会はまだまだ少なく、好評を博しました。

■高橋アキ氏(ピアニスト)と田中泯氏(ダンサー)によるパフォーマンスを、National School of Drama(NSD)との共催で2011年1月に開催。田中氏は過去にもNSDから招へいを受けており、NSD敷地内で定員100名程度のスペースで行なわれたパフォーマンスには、氏の訪印を心待ちにしていた学生、演劇ファンら200名以上が参集。「見たことの無いパフォーマンス」「日本のコンテンポラリーダンスをもっと知りたい」といった声が聞かれました。後日開催されたニューデリー日本文化センターでのパフォーマンスには、舞台芸術関係者のみならずデリー在住の外国人など多様な人達が集まり、今回のパフォーマンスを通じてセンターを知った人や、日本のコンテンポラリーダンスに興味をわき、より詳しい情報を求める人のようすから、日本との接点が少なかった人達の間に関心を植えつけられたことを実感できました。

日本映画祭に 過去最高の 1万4千人を動員



日本映画祭でのパネルディスカッション

好例の日本映画祭の他、アニメイベントへの出展を行いました。
 ■今年度で第14回を迎え、毎年恒例となった日本映画祭は、6都市（シドニー、メルボルン、キャンベラ、パース、ブリスベン、ホバート）を巡回し、過去最大の合計約1万4千人を動員。なかでも、のべ36本が上映されたシドニーおよびメルボルンの2都市では合計1万2千人が集まりました。シドニー会場では、ゲストに国際交流基金賞受賞者の映画評論家で日本映画大学学長の佐藤忠男氏、『京都太秦物語』の阿部勉監督、『東京マープルチョコチョコレート』の塩谷直義監督を招き、『おとうと』『告白』など話題作を上映しました。また同時に学生フォーラム、アニメ特集など、多彩なイベントを組み合わせて実施しました。今年度は協賛・協力が25団体に増加したことから、映画祭への期待は年々高まっているようです。

また、若者が数千人規模で集う、オーストラリアのアニメイベント「SMASH!」「ANIMANIA」へ初出展。若い世代へのアピールが功を奏し、メールマガジン登録者が一気に増えるなど、新しいファンを獲得することができました。

伝統文化、芸術、食… 広い関心に応じて 多様な事業を実施



シネマ歌舞伎が上映されたバンクーバーの映画館

日本への幅広い関心を持つカナダの人々。今年度も日本文化を核とする交流事業を広くカナダ全土に展開しました。

■文化事業では、バンクーバーなど各地映画祭への支援、11都市での映画上映、バンクーバーで初のシネマ歌舞伎の上映、5都市を巡った日本人演奏家によるクラシック音楽公演、「現代日本写真」展、「手ぬぐい」展等の展覧会、日加作家の文学対話事業、センター図書館を通じた日本文化やポップカルチャーの紹介等、多様な分野を紹介する事業を行ないました。

■日本語教育では、カナダ日本語教育振興会や各地の日本語弁論大会を支援し、3都市で日本語能力試験を実施。アルバータ州教育省に派遣中の日本語専門家と連携し、研修会や情報提供、調査や日本語教育導入促進活動などを実施しました。

■日本研究や知的交流の分野では、カナダ日本研究学会への支援、「日加韓社会政策シンポジウム」、震災直後の日本の現状を発信するシンポジウム、ウォータールー大学の日本研究センター設立準備会議への支援など、幅広く支援を行いました。

日・ベトナムの アニメファンと コスプレイヤーが競演



「Active Expo2010」に集まった日・ベトナムのコスプレイヤー達

ベトナムは、国民の半数以上が30歳以下という若者大国です。ベトナム日本文化交流センターでは、こうした特殊な環境に合わせ、ポップカルチャーを中心に多種多様な分野の事業を展開しました。

■ベトナムのアニメ・マンガファンが主催する「Active Expo2010」に、日本から世界コスプレサミット優勝者である因幡優里☆YuRiさん等を招へい。日本人としては初めて、コスプレコンテストの審査員を務めてもらい、「本場」日本のパフォーマンスを披露してもらいました。日本人とベトナム人コスプレイヤーによるダンスも、少ないリハーサル時間にも関わらず息はぴったり。2千人以上の観客に大好評でした。また、日本アニメーション映画祭では、チケット配布初日から千人以上が長蛇の列をつくるほどの反響のなか、原恵一監督『カラフル』から宮崎駿監督『千と千尋の神隠し』まで8本のアニメを上映。関連事業として、海外でも人気の声優・斎賀みつきさんのトーク&ミニライブを実施。声優の仕事の魅力を歌とトークで紹介しました。

日本理解と 日米関係を深める 各種事業への支援と 研修・派遣を実施



奈良美智展の会場 Asia Society Museum
撮影: Elsa Ruiz

多様な文化を複合的に紹介し、日本理解と日米関係深化を図るため、プログラム支援や研修、派遣事業などを行いました。

■本年開催された日本紹介イベント「Japan-NYC」（主催：カーネギーホール）では、奈良美智展や日本の女優を特集した映画祭を支援しました。またNY市立博物館で行われた、日本初の公式遣米使節団派遣（万延元年）から、2010年が150年目であることを記念した展示会を支援しました。主催事業としては米国で活躍する日本人アーティストを中南米に派遣する事業で、4つのグループを9カ国13都市に派遣しました。

■気候変動や移民問題など世界が直面する多様な課題を扱う日米共同研究事業への支援とともに、日米関係を担う次世代リーダーの育成を目的に、中堅・若手日本専門家を対象とした「日米次世代パブリック・インテリクチュアル・ネットワーク・プログラム」、国際関係論およびジャーナリズムを学ぶ米国大学院生を対象とした2件の訪日研修を実施しました。さらに草の根レベルでの対日理解を促進する助成事業も実施しました。

米州 | **ロサンゼルス日本文化センター**

日系企業の集まる 西海岸ならではの 事業を開催



ドロッカー研究所のリック・ワーツマン所長の講演

全米を対象とした日本語教育事業をはじめ、さまざまな事業を展開していますが、今年は南カリフォルニア日系企業協会（JBA）とともに多くの事業を展開しました。

■JBAは2011年創立50周年を迎え、記念行事に作曲家・ピアニストの加古隆氏を迎え、リサイタルを共催しました。氏の奏でる美しい旋律に、同行事のテーマである、企業から地域コミュニティへの感謝の気持ちが伝わるイベントとなりました。

■米国8都市での2年にわたる調査結果が「米国における日系企業の社会貢献活動についての調査報告書」として2010年5月に発行され、その報告会をロサンゼルス日本文化センターで11月に開催しました。通称「もしドラ」で話題となったピーター・ドロッカー博士の名を冠したクレアモント大学院大学ドロッカー研究所からリック・ワーツマン所長を招き行われた講演では、「企業による社会貢献活動は、マネジメントの重要な戦略と位置づけられるべき」との興味深い内容に、聴講した企業関係者も大いに関心を寄せていました。

米州 | **サンパウロ日本文化センター**

日本料理の神髄 京料理の味と芸術性、 緻密さに感嘆の声



京料理を紹介するデモンストレーション

ブラジルには数多くの日本料理店があり、寿司などに代表される日本食が大いに注目されています。サンパウロ日本文化センターではその状況を踏まえ、2010年度は食をテーマとしたイベントを多数開催しました。

■京都の老舗料亭からふたりの料理人を招き、ブラジルとサンパウロで本場の京料理を紹介をするイベントを実施しました。ブラジルでは、ブラジルの食材を使った京料理をブラジル政府関係者や、料理を扱うマスコミ関係者に試食してもらったところ、「味はもちろん、一皿一皿がまるで芸術作品のようで、これまで経験した日本食とは別格」という感想が聞かれました。

サンパウロでは、一般市民を対象に「日本料理における野菜の下処理」「日本料理における“だし”の必要性」についてレクチャー、デモンストレーションを行いました。季節や温度、素材など、準備の段階から緻密に計算されているようすに、参加者から感嘆の声があがり、日本人の「おもてなしの心」を味わっていただくことができました。

米州 | **メキシコ日本文化センター**

交流400年記念に 22年ぶりの 歌舞伎舞踊公演



「鶯娘」の舞台より

日本メキシコ交流400周年を記念する大型文化事業として、モンテレイ市とメキシコ市で歌舞伎公演を実施しました。

■モンテレイ市では初めて、メキシコ市では1988年以来22年ぶりの歌舞伎公演となりました。中村京蔵、中村又之助、市川喜之助各氏に加え、長唄、三味線、鳴物をはじめとするスタッフ総勢19名がメキシコ入り。「鶯娘」と、「石橋（しゃっきょう）」が披露され、観客は、ときに静かで優美、ときに激しく勇壮な歌舞伎舞踊の真髄を堪能しました。また、初めて歌舞伎に触れる観客が公演をさらに楽しめるように、歌舞伎の歴史、音楽、女形のしぐさ、立役の扮装（化粧・衣装）についてのユーモアあふれる解説・実演が加えられました。中村京蔵氏とともに女形になって泣いたり、中村又之助氏と一緒に見得を切ってみたり、来場者も参加できる楽しいレクチャーは多くの観客の印象に強く残ったことでしょう。

欧州 | **ロンドン日本文化センター**

演劇文化の本拠地 ロンドンならではの 深みのある事業を展開



日本の演劇作品をイギリス人俳優がリード

日本への関心を高めてもらうことを目指し、英国全土でパートナー機関との連携企画や自主企画を実施しています。

■ロンドン日本文化センターが行う文化芸術に関わる事業は、毎日が挑戦の連続です。多様な文化背景を持つ英国の人びとの関心とうまくマッチングするよう、美術、演劇、映画などの分野、伝統と現代、アーティストの個性など、さまざまな要素を考慮して企画しています。演劇分野で深い歴史をもつ当地では、日本演劇作品にふれた経験のある演劇関係者も多く、80年代以降の日本の劇作家や作品を系統立てて紹介した扇田昭彦氏による現代演劇のレクチャーが好評を博しました。また、作家・演出家の坂手洋二氏、長塚圭史氏を招き、トークショーとともに英国人演出家と役者によるドラマリーディングを実施。作品の普遍性や固有性を追求するふたりの手法が、さまざまな議論を巻き起こしました。助成事業としては、地方を巡回したパペットによる「浦島太郎」の公演や、65人の被爆者の肖像画展等をはじめとするさまざまな事業を支援しました。

開所の初年度から 日本—スペインの 文化交流を 積極的に推進



金剛永謙の演じる能楽「雪」より
撮影：Paco Manzano

マドリード日本文化センターはマドリード市との協定に基づき2010年4月に開設され、日西文化交流の中核機関として、文化芸術ほか日本研究講演会等、多岐にわたる事業を実施しました。

■開所初年度の大規模な事業として、金剛流能楽公演をマドリード、バルセロナ、リスボンで実施したほか、レナード衛藤 Blendrums (和太鼓、タップダンス、サクスのユニット) を招へいし、マドリード市の「白夜祭」、バルセロナの「アジア・フェスティバル」をはじめ、各地で公演を実施。日本の伝統楽器と現代楽器のフュージョンによる新しい音楽の世界を紹介するこの事業は、マドリード市やバルセロナ市などの自治体やカサ・アジアとの協力関係を深めるきっかけともなりました。また、東日本大震災後の2011年3月には、マドリード市とカサ・アジアが実施した被災地支援イベント「日本のための千羽鶴」にも協力しました。

■2010年9月には、日本語教育専門家による研修や教育相談などを開始するとともに、日本語教材やマンガやアニメに関する書籍を中心とする図書室を開館しました。

コンクール大好き! ロシアや海外の 「俳人」や子どもたち が腕くらべ



子供絵画コンクールに寄せられた作品

開設から3年目を迎え、活動も軌道にのった2010年度は、ふたつのコンクールを実施し、大成功を収めました。俳句コンクールと子ども絵画コンクールです。

■詩を愛するお国柄のロシアでは、誕生日などのお祝いに自作の詩をプレゼントすることが珍しくありません。俳句に対する関心も高く、すでに多くの「俳人」がいます。ロシア国内のみならず、俳句コンクールには、旧ソ連の国、ヨーロッパ、アメリカ、そして台湾、日本からも秀作3,100句が集まりました。また、雑誌「民話」と協力して実施した子ども絵画コンクールも、予想以上の反響を呼びました。俳句と同様、イスラエル、ウクライナ、ベラルーシなど海外からも応募があり、3,366点の力作が集まりました。どれも子どもたちからの日本に対する暖かい思いが感じられる作品ばかりで、全作品をウェブサイトに掲載しました。教育者の間でも関心は高く、学校や絵画サークルから団体としての応募もありました。コンクールは子どもたちだけでなく、指導者にとっても力の見せ所なのです。

若い世代を対象に 興味を喚起する イベントを 重点的に実施



「キャラクター大国、ニッポン」展より

親日的な風土を持つハンガリーでは、以前から日本の伝統文化の認知度が高く、人気を誇ってきましたが、2010年度は、将来の日本とハンガリーの交流を担う次世代の若者層のあいだでの関心拡大を目標に、現代日本文化やポップカルチャーをテーマとする多様な事業を積極的に行いました。

■なかでも高い関心を集めた事業が、ハンガリー貿易観光博物館との共催によりブダペストで実施した「キャラクター大国、ニッポン」展です。日本社会でブームをまき起こした国民的キャラクターの世界を、幅広く紹介するこの展覧会は大きな話題を呼び、予想を大きく上回る来場者を得たほか、ハンガリーの主要なメディアでも数多く取り上げられました。その他にも、「次世代」を対象として、元文部科学省留学生による現代日本のファッションをテーマとした講演会や、日本のサブカルチャーに関する著作を多く持つ写真家・編集者の都築響一氏による講演会等、日本文化の多様な側面を知ってもらうための事業を企画・実施しました。

映像を通して 「ヒロシマ」 そして反核、 非戦の思いを伝える



地元メディアのインタビューに答える田邊雅章氏

2010年度は、広島への原爆投下をテーマにした映画祭「ヒロシマ」を開催。映画を中心にさまざまな交流を行いました。

■映画祭では『はだしのゲン』『原爆の子』『夕凧の街、桜の国』『父と暮らせば』『黒い雨』『鏡の女たち』の6作品を上映。日本映画のファン層を超え、広くエジプト市民の注目を集めました。また映像制作者で、被爆者でもある田邊雅章氏を広島より招き、講演と、同氏が制作した原爆投下前のヒロシマの町並みをCGで再現した映像作品を紹介しました。史実としての原爆に関する理解を促進するだけでなく、映画上映や講演会を通じ、原爆がもたらした影響を多様な視点、主体から紹介する機会となり、日本の反核・非戦への思いについても、理解と共感を得られたと思います。また、舞台芸術では、日本・トルコ共同制作音楽公演「Sound Migration」、日本・タイ・マレーシアの混成メンバーからなる「Unit Asia ジャズ公演」など、新しい芸術表現を模索して、国境を越えてアジアとコラボレートする日本の創造活動を積極的に紹介しました。



資料

Appendix



1—日本文化紹介派遣

主催……28件(60カ国106都市) 助成……56件(41カ国86都市)

食文化、ロボット、アニメ、浮世絵木版画、建築など日本の文化13分野に関し、各分野専門家を世界各地に派遣し、講演、デモンストレーション、ワークショップを行いました。

●柴田崇徳(福祉系ロボット「パロ」開発者・産業技術総合研究所 P.15参照)／氷川竜介(アニメ評論家)、吉浦康裕(アニメーション監督)／川村浩司(加賀料理・料亭「つばき」料理長 P.15参照)／三遊亭茶楽(英語落語家)、林家今丸(切り紙)／西沢立衛(建築家)など

2—文化人招へい

文化人招へい……26名(22カ国)

文化の諸分野において大きな影響力をもつ、以下の方々をはじめとする各国の文化人を招へいし、日本の実情視察、関係専門家などとの意見交換を行いました。

●チチ・ペラルタ(音楽家:ドミニカ共和国)／ソブド・ナムスライ(国立ドラマ劇場館長・女優:モンゴル)／フアード・シャーキル(写真家:イラク)、テプチャイ・ユン(タイ公共放送サービス専務理事:タイ)など

3—文化協力

派遣……8件(8カ国13都市) 招へい……1件(1カ国) 助成……12件(13カ国17都市)

日本が有する知見や専門性を活かして、各分野の専門家の派遣や招へいを通じて、各国における文化活動を支援しました。

●樺太時代に建設された日本の歴史的建造物保存協力(ロシア)／山下泰裕氏・井上康生氏による柔道指導(イスラエル・パレスチナ)、日本の伝統工芸に関する学芸員研修(ポーランド)など

4—市民青少年交流

主催……7件 助成……48件(28カ国)

●ふろしきワークショップ(2カ国4都市)…リユース可能な包装材としてのふろしきを環境教育的観点から紹介するとともに、参加型ワークショップを米国(3都市)とメキシコで実施しました。

●アジア、中東・アフリカ地域の中学・高校教員招へい(63名)…海外青少年の日本理解促進を目的に、標題の地域を中心に12カ国から中学高校教員を招へい。学校訪問、文化施設などの視察や関係者との交流を行いました。

●日韓プラストビート・プロジェクト…日韓の大学生がひとつの模擬音楽会社を設立して音楽イベントをゼロからプロデュース、その収益を自分たちの選んだNPO団体等に寄附する国際社会教育プログラムを実施しました。

●東アジア地域若手リーダー層招へい…21世紀東アジア青少年大交流計画(JENESYS)事業の一環として、ASEANを中心とする東アジア地域の若手リーダー層を招へいし、東アジアにおける重要な共通課題について、日本の実例を共有しつつ活発な議論

が行なわれました。

①「ESDと環境教育—身近な自然環境の保全と地域社会の持続可能な発展の取り組み」15カ国 24名

②「文化によるまちづくり—文化財の創造的継承の取り組み」15カ国 25名

5—国際展

第12回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展(コミッショナー:北山恒、出品作家:塚本由晴、西沢立衛)、第14回バングラデシュビエンナーレ(コミッショナー:林寿美、出品作家:名和晃平)に日本側主催者として参加。また、第29回サンパウロビエンナーレに日本人作家(Chim↑Pom)およびキュレーター(長谷川祐子)を派遣しました。

6—海外展

主催……企画展:9件(8カ国13都市) 巡回展:93件(48カ国90都市)

助成……海外展:59件(34カ国) 市民青少年美術交流:7件(6カ国)

海外の美術館などとの共催により、以下をはじめとする、さまざまな展覧会を実施しました。

●「新次元 マンガ表現の現在」展(韓国 P.12参照)／「近代日本工芸1900-1930—伝統と変革のはざまに」展(フランス P.12参照)／山口晃展「Singa-planet」(シンガポール)、「出発(たびだち)—6人のアーティストによる旅」展(ポルトガル、メキシコ)／「WA—現代日本のデザインと調和の精神」展(フランス、韓国)など

○基金所蔵品による世界巡回展[21セット93件(48カ国90都市)]

海外の美術館等との共催で、伝統工芸から日本人形、キャラクター、プロダクトデザイン、写真、現代美術など多種多様な基金巡回展を世界各地で実施しました。主な巡回展としてキャラクター大国、ニッポン／ストラグリッド・シティーズ—60年代日本の都市プロジェクトから／手仕事のかたち—伝統と手わざ—／武道の精神／日本の現代写真—1970年代から今日まで／ウィンター・ガーデン:日本現代美術におけるマイクロポップ的想像力の展開など。

7—造形美術情報交流

国際交流のための基盤強化とネットワークづくり……5件(16カ国)

○第6回アジア次世代美術館キュレーター会議…アジアの美術館のネットワーク構築を目指し、インドで開催。

○中東学芸員招へい、米国学芸員招へい(P.12参照)

○ニューヨーク近代美術館(MoMA)の日本美術ソースブック刊行への協力

○日中韓文化交流フォーラム関連事業として、「あいちトリエンナーレ2010」にあわせて、国際シンポジウム「国際展のミッション—東アジアからの展望」、ならびにアーティストユニット西京人による作品展示を実施。



[左] 第12回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展

カタログ「TOKYO METABOLIZING」

[中] 「新次元 マンガ表現の現在」展カタログ

[右] 山口晃「Singa-planet」展カタログ

クリエイティブな分野／産業に従事する若手クリエイターを日本に招へい……

19名 (13カ国)

21世紀東アジア青少年大交流計画 (JENESYS) プログラムの一環として、アーティスト、デザイナーなどを日本に招き、作品制作、地域との交流やネットワーク構築のための機会を提供しました。

8—海外公演

主催……20件 (36カ国68都市)

以下をはじめとする海外公演を主催しました。

●スペイン・ポルトガル能楽公演／アフリカAGA-SHIO + ミュージック&リズムス 公演 (コンゴ民主共和国、南アフリカ) / “TRANS-CRIOLLA” 南米公演 (アルゼンチン、ウルグアイ、チリ P.13 参照) / 韓国J-POP (加藤和樹) 公演 / ジャズ (Unit Asia) 中東 (エジプト、トルコ) ・インド公演 / ブラジル舞踏 (大駱駝艦) 公演 / 舞踏ロシア・中国公演 (P.13参照) / 東南アジア現代邦楽公演 (カンボジア、ラオス、ベトナム、ミャンマー) / 極東ロシア津軽三味線・民謡公演など

助成 (国内公募) ……124件

海外公演助成プログラム (公募) を通じて、世界各地で行われた日本の舞台芸術の海外公演に助成しました。

パフォーミングアーツ・ジャパン (PAJ) ……23件 (北米: 13件、欧州: 10件)

「パフォーミングアーツ・ジャパン (PAJ) (日本の優れた舞台芸術作品を紹介する米国、欧州の文化芸術団体向けの助成プログラム) を通じて欧米で行われた舞台芸術公演・共同制作プロジェクトに助成しました。

9—国際舞台芸術共同制作

実施……3件 (5カ国4都市)

日本・トルコ共同制作現代音楽公演「〈日本⇄トルコ: わたりゆく音〉 Sound Migration」、日韓現代演劇共同制作「焼肉ドラゴン」韓国公演など。

10—舞台芸術情報交流

実施……10件

国内外の舞台芸術団体、プレゼンター、フェスティバル実施団体、劇場間の情報交流促進を図るため、「国際舞台芸術ミーティング in 横浜2011」や、日本の舞台芸術情報を日本語・英語のバイリンガルで発信するウェブサイト「Performing Arts Network Japan」 (<http://www.performingarts.jp/>) などの事業を実施しました。

11—日本理解促進出版・翻訳

助成……57件 (25カ国)

日本語で書かれた優れた図書 (人文 / 社会科学 / 芸術分野) の外国語への翻訳および外国語で書かれた日本文化紹介図書の出版を支援する公募プログラムを通じ助成を行いました。

12—国際図書展

海外開催の国際図書展に共同参加……14件 (14カ国14都市)

日本の出版文化の紹介と対日理解促進のために、社団法人出版文化国際交流会等と共同参加しました。

○第21回アブダビ国際ブックフェア

○第12回モスクワ国際知的図書展 non/fiction など

13—テレビ番組交流促進

日本のテレビ番組の提供……26件 (23カ国)

日本のテレビ番組の海外放映を促進するため、スリランカ国営 S.L.C. へ「やってみようなんでも実験」「海猿 海の捜査線 海上保安官物語」などの番組を提供しました。

14—日本理解促進映像制作 (助成)

映画とテレビ番組の制作費助成……9件 (7カ国)

海外における日本理解を促進するため、俳句を嗜むクロアチア人の日常を描いたドキュメンタリー (クロアチア) など、日本に関する映画と番組制作に対し助成しました。

15—海外日本映画祭

日本映画祭・日本映画上映会……84件 (55カ国)

海外の国際映画祭での日本映画上映への助成……46件 (25カ国)

日本映画祭や日本映画の上映を、以下のとおり在外公館・海外文化機関等と共同開催しました。

○黒澤明生誕100周年記念映画祭巡回上映 (巡回国: 韓国、フィリピン、インドネシア、タイ、マレーシア)

○エジプトで原爆に関する映画を特集する「Hiroshima」を実施、さらに他団体主催の事業を助成し、上映の機会をつくりました。

16—映像・出版情報交流

○季刊誌『Japanese Book News』(No.64~67) 刊行…海外の出版社・翻訳者向けの日本の文芸の情報誌を刊行

○『New Cinema from Japan』共同発行 (年2回) …日本映画の基本情報を海外に提供する内容の書籍をユニジャパンと共同で発刊

17—国際漫画賞・アニメ文化大使事業への協力

海外でマンガの普及啓蒙活動に貢献する新進のマンガ作家を顕彰する「国際漫画賞」(主催: 国際漫画賞実行委員会) の最優秀賞受賞者と優秀賞受賞者計4名を日本に招へいするとともに、海外におけるアニメ文化大使 (ドラえもん) の外国語字幕付DVDの上映会に協力しました (46回、15カ国18都市)。

18—日中交流センター

2010年度は「中国高校生長期招へい事業」として第五期生38名を招へい、また「ふれあいの場」が重慶市、広東省広州市に新たに開設されました。さらに「心连心ウェブサイト」上でも日中の若者の交流を促進しています。

[左] ウェブサイト「Performing Arts Network Japan」

[中] 『Japanese Book News』

[右] 『New Cinema from Japan』



海外における日本語教育事業概観

1—海外日本語教育機関のネットワーク形成と強化

①日本語教育機関などの調査

海外日本語教育に関する以下の調査およびそれに基づく分析、報告を行いました。

○日本語教育機関調査2009年／日本語教育国・地域別情報

②日本語教育情報交流

下記の日本語教育関係資料を刊行し、配布およびウェブサイトで公開したほか、図書館に寄贈しました。

「日本語教育通信」(ウェブサイト)

『国際交流基金日本語教育紀要』7号(冊子・ウェブサイト)

③外国人による日本語弁論大会

「第51回外国人による日本語弁論大会」を新潟市で開催しました。

④JFにほんごネットワーク(通称さくらネットワーク)

2008年度からの3年間で海外の中核的日本語教育機関100機関との連携を目指す「JFにほんごネットワーク」では、合計102機関を中核メンバーとして選定し、目標を達成。これらの機関によるセミナー、巡回指導、教材開発などを支援しました。

⑤日本語専門家等派遣

海外における日本語教育の中核となる機関に対して、以下の通り日本語上級専門家、日本語専門家などを派遣しました。また、2011年度に派遣する日本語専門家などに対して、業務に必要な専門知識・技能に関する派遣前研修を実施しました。

○日本語上級専門家：30カ国50件

○日本語シニア専門家：1カ国1件

○日本語専門家：23カ国38件

○日本語指導助手：10カ国12件

○日本語専門家等派遣前研修：1件

⑥21世紀東アジア青少年大交流計画(JENESYS)受託事業

JENESYSプログラムの一環として受託し、大学で日本語教育を専攻した若手日本語教師を東アジア諸国に派遣しました。

○若手日本語教師派遣：13カ国60名

⑦日本語教育機関支援・日本語教育プロジェクト支援

海外において日本語教育の中核となる機関に助成を実施しました。

○日本語普及活動助成：63カ国150件

⑧国内連携による日本語普及支援

日本語教師養成課程を有する日本国内の大学・大学院との連携により海外日本語教育実習生(インターン)の派遣を行いました。また、日本語教育学会が実施する海外日本語普及・日本語教育振興事業に対して助成を行いました。

○海外日本語教育インターン：26カ国286件

○日本語教育学会助成：2件

2—日本語能力試験

2010年から改定された新しい「日本語能力試験」が始まり、コミュニケーション能力をより重視した試験になると共に、認定レベルもこれまでの4段階(1～4級)から5段階(N1～N5)になりました。2009年から始まった試験の年2回(7月・12月)実施を継続し、2010年は、海外56の国・地域(台湾除く)で421,546人(2回合計)が受験しました。

また、『平成20年度日本語能力試験 分析評価報告書』の出版や、年少者向けインターネット日本語テスト「すしテスト」の運営も行いました。

3—日本語国際センターにおける研修事業

①海外の日本語教師招へい

海外の日本語教師を招へいし、以下の教師研修を実施しました。また、研修生と地域住民の交流など、地域のニーズに配慮した事業を併せて実施しました。

○海外日本語教師長期研修：33カ国53名

○海外日本語教師短期研修：38カ国103名

○韓国高校日本語教師研修：55名

○中国(大学・中等学校)日本語教師研修：60名

○インドネシア中等日本語教師研修：20名

○タイ人日本語教師短期訪日研修：21名

○マレーシア中等教育日本語教師研修：7名

○米国日本語教師研修：20名

○日本語教育指導者養成プログラム(修士課程[新規])：6カ国6名

○日本語教育指導者養成プログラム(修士課程[継続])：6カ国8名

○日本言語文化プログラム(博士課程[新規])：1カ国1名

○日本言語文化プログラム(博士課程[継続])：5カ国6名

○海外日本語教師上級研修：5カ国8名

②21世紀東アジア青少年大交流計画(JENESYS)受託事業

○東アジア若手日本語教師特別招へい研修：9カ国34名

○南アジア若手日本語教師特別招へい研修：5カ国18名

③その他の受託事業として、以下の研修を実施しました。

○ロシア若手日本語教師研修：1カ国7名

○台湾日本語教師短期研修：1地域2名

4—日本語教材開発・制作支援

①日本語教材自主制作・普及

○「エリンが挑戦! にほんごできます。」(映像教材・ウェブサイト)

NHK教育テレビで再放送。ブラジル、スリランカ、韓国、フィンランド、インドネシア、アメリカ(ハワイ州、南カリフォルニア)、ベトナム、ラオスの8カ国、計9つのテレビ局で放送(現地語の字幕・吹替版)。また、2010年3月に公開したWEB版「エリンが挑戦!



[左] 日本語教授法シリーズ 第3巻「文字・語彙を教える」

[中] タイ語日本語教材『こはるといっしょにひらがなわあ〜い』

[右] 『基礎日本語学習辞典』アラビア語版

にほんごできます。』は既存の日本語、英語版に加え、スペイン語、ポルトガル語、中国語、韓国語の4カ国語版を追加制作。

○『国際交流基金 日本語教授法シリーズ』（書籍）

第3巻『文字・語彙を教える』、第10巻『中・上級を教える』、第12巻『学習を評価する』を出版してシリーズ全14巻刊行完了。

○「みんなの教材サイト」（ウェブサイト）

コミュニティ機能および管理機能を拡充、教材用素材を追加。アクセス件数は491万件。

○「日本語でケアナビ」（ウェブサイト）

ことばから例文を探す機能を追加。アクセス件数は74万件。

○「アニメ・マンガの日本語」（ウェブサイト）

場面別表現や漢字クイズ、用語クイズなど8コンテンツを追加し計13コンテンツに拡充。このうち5コンテンツのスペイン語、韓国語、中国語版を公開。アクセス件数は209万件。

○「NIHONGO eな」（ウェブサイト）

日本語学習に役立つウェブサイトやツールを紹介するポータルサイトを2010年4月に公開。2011年3月にはコンテンツの一部を中国語および韓国語にて多言語化。アクセス件数は77万件。

○「JF日本語教育スタンダード」

JF日本語教育スタンダードの冊子版として、『JF日本語教育スタンダード2010』および『JF日本語教育スタンダード2010 利用者ガイドブック』を発行。同冊子はウェブサイトからも無償ダウンロード可能。また、同ウェブサイトおよび「みんなの「Can-do」サイト」への「JF Can-do」の追加、さらに「みんなの「Can-do」サイト」では「My Can-do」作成等の機能を拡充。

○「JF日本語教育スタンダード」準拠日本語教材『まるごと 日本のことばと文化（入門A1）』（試用版）を開発。

○2010年7月に『基礎日本語学習辞典』アラビア語版を刊行。

② JF日本語教育スタンダード普及活動

○J-GAP（日本語グローバル・アーティキュレーション・プロジェクト）会議を2件実施。日本語教育の現場の繋がりを促進する有効なツールとして「JF日本語教育スタンダード」を広く紹介しました。

○国内外のセミナーやワークショップ等を20件実施。

③ 日本語国際センター図書館

日本語教育専門図書館として、図書・視聴覚資料45,851点、雑誌・紀要等709誌を所蔵し、情報・資料の提供を行いました。

5— 関西国際センターにおける研修事業

① 専門日本語研修・日本語学習者訪日研修など

関西国際センターでは、海外における日本語学習者支援の観点から、他機関では十分に教育を行うことが難しい専門性の高い日本語研修、学習奨励研修を以下のとおりに、また研修生と地

域住民の交流等、地域のニーズに配慮した事業を実施しました。

○専門日本語研修：[外交官] 30カ国32名 / [公務員] 8カ国8名 / [文化学術専門家] 18カ国49名

○日本語学習者訪日研修：[大学生] 29カ国49名 / [各国成績優秀者] 56カ国56名 / [高校生] 11カ国29名 / [李秀賢氏記念韓国青少年招へい事業] 1カ国30名

○アジア・ユース・フェロシップ高等教育奨学金訪日研修：11カ国18名

○大学連携大学生訪日研修：20カ国90名

○大阪府クィーンズランド州日本語教師研修：1カ国5名

○インドネシア人介護福祉士候補フォローアップ研修：36名

○大阪府JET来日時研修：4カ国13名

② 21世紀東アジア青少年大交流計画（JENESYS）受託事業

○東アジア日本語移動講座：4カ国40名

○東アジア日本語履修大学生：[春季] 5カ国20名 / [夏季] 7カ国24名 / [秋季] 7カ国25名

○南アジア日本語履修大学生：6カ国39名

③ その他の受託事業として、以下の研修を実施しました。

○ニュージーランド日本語教師日本語研修：6名

○香港中文大学大学生訪日研修：10名

○南オーストラリア日本語教師訪日研修：10名

○インドネシア人大学生日本語研修：2名

○韓国慶尚南道日本語教師訪日研修：20名

○韓国国際財団職員訪日研修：1名

○キャノンベトナム訪日研修：1名

○豪ヴィクトリア州高校生訪日研修：20名

○ナポリ大学オリエンターレ訪日研修：24名

④ 業務委託

競争の導入による公共サービスの改革に関する法律（平成18年法律第51号）第14条に基づき、在日外交官研修を国際日本語普及協会に業務委託し、実施しました（18カ国25名）。

⑤ 関西国際センター図書館

日本の文化・社会を紹介する資料を中心に図書・視聴覚資料48,092点、雑誌等280誌を所蔵し、情報・資料の提供を行いました（利用者数：15,836人、貸出点数：8,548点）。

6— 経済連携協定（EPA）に基づく看護師・介護福祉士候補者の日本語教育

経済連携協定に基づくインドネシア人・フィリピン人看護師・介護福祉士候補者への日本語予備教育受託事業を実施しました。

○インドネシア：104名 / フィリピン：131名

[左] ウェブサイト「アニメ・マンガの日本語」中国語版
<http://www.anime-manga.jp/chinese/>

[中] ウェブサイト「NIHONGO eな」韓国語版
<http://nihongo-e-na.com/kor/kor/>

[右] リニューアルされた関西国際センターのウェブサイト
<http://www.jfkc.jp/>



日本研究・知的交流事業概観

1—日本研究機関の支援

各国において日本研究の中核的な役割を担う機関が、その研究基盤を強化し優れた人材を育成できるよう、各機関で必要とされるさまざまな事業への支援を実施しました。2007年度より、各機関のニーズに応じて、客員教授派遣、研究・会議助成、教員拡充助成、図書拡充などを組み合わせて、包括的な支援を行うシステムに移行しています。

①米国、カナダ、中南米地域における機関支援 [15機関]

米国…コロラド大学／バージニア大学／ハワイ大学／五大湖周辺私立大学連盟／マサチューセッツ工科大学など
中南米…エル・コレヒオ・デ・メヒコ／サンパウロ大学

②アジア・大洋州地域における機関支援 [28機関]

東アジア…ソウル大学／高麗大学／南開大学／復旦大学など
東南アジア…インドネシア大学／チュラロンコン大学／タマサート大学／フィリピン大学／マラヤ大学／ハノイ国家大学など
南アジア…ジャワハルラル・ネルー大学／デリー大学
豪州…オーストラリア国立大学

③欧州・中東・アフリカ地域における機関支援 [27機関]

欧州…ヴェネツィア大学／ロンドン大学東洋アフリカ研究学院／ボン大学／パリ国立政治学財団／ルーヴァン・カトリック大学／極東国立総合大学東洋学大学／ザグレブ大学／ヴィタウタス・マグヌス大学など
中東…カイロ大学政治経済学部／バグダッド大学／テヘラン大学世界研究学部など

④北京日本学研究中心事業

北京外国語大学に設置された北京日本学研究中心に対して、日本人教授など、のべ15名を派遣して講座の運営を行ったほか、大学院生22名の日本への招へい、研究・出版に対し支援を行いました。また北京大学に設置された現代日本研究センターに日本人教授のべ11名を派遣したほか、大学院生・講座関係者23名を日本に招へいしました。

2—日本研究フェロースhip

長期……学者・研究者68名(28カ国)・博士論文執筆者74名(26カ国)

短期……研究者49名(19カ国)

国際交流基金は、設立当初より日本に関わる研究を行う学者・研究者を日本に招へいするフェロースhipプログラムを実施しており、これまでに4,500名以上が海外から日本を訪れて研究や調査を行い、日本の専門家との人的ネットワークを築いています。2010年度は上掲の通りのフェローが日本での調査研究活動を行いました。

また、その研究成果の発表の場として、公開講座(フェローセミナー)を本部と京都支部で企画実施しました。

3—日本研究ネットワーク強化

国および専門分野を越えた日本研究者の横断的な協力・連携ネットワーク形成のため、次のような支援を行いました。

①日本研究に関する学会に対する支援や日本研究者・機関に関する調査の実施

第2回東アジア日本研究フォーラム、米国アジア研究学会における日本研究関係セッションの開催など、国際的な学会に対する支援や、米国、オーストラリア、中国、韓国における日本研究者・日本研究機関に関する調査を実施しました。

4—知的交流会議などの開催・支援

国際会議・知的対話事業の企画・実施…25件

会議開催経費・参加者旅費の支援…84件

世界・地域の共通課題に取り組むため、以下をはじめとする知的交流事業の開催と支援を行いました。

①中国知識人グループ招へい

中国の知識人と、日本側関係者との未来的な知的ネットワークの構築を目的とする事業。従来日本とのつながりが少なかった中国の知識人4名からなるグループを招へいし、日本人研究者との意見交換・各種機関訪問・地方都市訪問などを実施しました。

②社会的企業を巡る日韓対話

日本と韓国で、社会のさまざまな問題に取り組むために社会的企業を立ち上げて運営している実践者および企業家と社会的企業の研究者が一堂に会し、ソウルで会議と公開シンポジウムを実施しました。社会構造が互いに似ている日韓両国で共通の問題に携わる者同士の対話の場として、有益な事業となりました。

③Museology(美術館・博物館学)に関する国際シンポジウム

国際交流基金とセインズベリー日本藝術研究所(英国)は、2010年9月にシンポジウム「新しいMuseology—文化遺産と現代文化の融合を求めて」を東京で開催しました。マンガを活用して効果的に文化遺産を紹介した大英博物館の「縄文土偶展」や文化遺産を活用した「まちおこし」を進める青森県立美術館の事例を紹介し、美術館・博物館における展示手法のイノベーション、文化遺産と現代文化の融合、そして美術館・博物館の社会的に果たすべき役割やMuseology(美術館・博物館学)の新たな方向性についての議論が交わされました。

④ユニバーサルファッションに関するセミナー

国際交流基金では、2010年10月にタシケント(ウズベキスタン)とモスクワ(ロシア)で公開セミナー「調和的社会的実現に向けた日本の取り組み：ユニバーサルファッションを例として」を実施しました。障がい者・高齢者など社会的弱者のニーズに対応するため、デザインが日本でどのように活用されているか、またそこに日本文化やものづくりの特性がどのように現れているかを紹介し、大きな反響を呼びました。

⑤第2回日亜交流シンポジウム(2011年3月29日)

2010年1月に東京で行われた第1回シンポジウムに引き続き、両国間の関係を学術・文化的視点・テーマから考察、議論するシンポジウムを、日本・アルゼンチン双方の外務省、在アルゼンチン共和国日本大使館が共催し、プエノスアイレスで行いま

た。今回は特に日亜両国における自然観、日亜両国における現代美術の動向と社会におけるその受けとめ方等のテーマを設定し、今後の交流の具体的な展望を得ることができました。

⑥日米次世代パブリック・インテリジェントネットワーク事業 (2010年通年)

米国モーリン・アンド・マイク・マンスフィールド財団との共催により2009年度に開始した新規事業。米国において今後活躍が期待される中堅・若手世代の日本専門家(研究者、実務者)を対象に、日本訪問を含む2年間の研修プログラムを通じて、日米関係の多岐に渡る論点について理解を深めるとともに、緊密なネットワークを形成するための多彩な機会を提供します。2010年度はワシントンD.C.やモンタナにおいて滞在型の集中研修を行ないました。

⑦東南アジア若手イスラム知識人グループ招へい(2010年11月)

インドネシア、マレーシア、フィリピン、タイ、シンガポールでイスラム研究を専門とする若手大学講師8名が、日本を例にとった社会の近代化とイスラムの調和をテーマに、日本の研究者による講義や意見交換などを通して日本理解を深めました。また、2011年3月にはインドネシア・ジャカルタの国立イスラム大学において、セミナーの形式でフォローアップ事業を実施し、研究者、学生を中心とした聴衆に日本での体験を還元することができました。

5——知的交流フェローシップ

招へい……21件

日本との知的対話のネットワーク構築を目的として、現代社会の共通の課題を研究する東欧、中東、およびアフリカ地域の人文・社会科学の若手研究者に、訪日調査、研究の機会を提供しました。

6——知的リーダー交流

「アジア・リーダーシップ・フェロープログラム」は、アジア各国で活躍する知識人に日本からの参加者を加えた合計7名が、東京で2カ月間をともに過ごしつつ対話を重ねる事業。参加者は、グローバルな課題などについて各方面のオピニオンリーダーと、集中的な意見交換を行うことにより、日本の関係者との、そして参加者間のネットワークを形成しました。また、地方都市訪問などの各種プログラムを通して、日本社会・文化に関する理解を深めました。

7——東南アジア研究地域交流プログラム

東南アジア地域における東南アジア研究の促進を目的に、現代の東南アジアにおける中国移民をテーマとし、日本を含めた国際共同研究を行う東南アジア研究地域交流プログラム(SEASREP財団主催)を支援しました。

8——日米センター

主催・共催……15件

①安倍フェローシップ

日米の研究者など12名にフェローシップを供与し、現代の地球規模の政策課題で緊要の取り組みが必要とされる問題に関する調査研究を促進し、日米の新しいパートナーシップとネットワーク形成を推進しました。またジャーナリストによる、掘り下げた調査研究を通じて、日本および米国の相互理解に貢献する報道を支援する安倍ジャーナリスト・フェローに4名を採用しました。

②日米草の根交流コーディネーター派遣(JOI)プログラム

日本との交流機会が比較的少ない地域における草の根レベルの交流や日本理解の促進を目指し、新たに4名のコーディネーターを派遣しました。

③そのほか「ジャーナリズム専攻大学院生招へい」「国際関係論専攻大学院生招へいプログラム」「NPOフェローセミナー」などを実施しました。

助成

①助成プログラム

「外交と安全保障：伝統的および非伝統的アプローチ」「グローバル経済、地域経済の抱える課題」「市民社会の役割」の3つを対象領域として日米の団体が共同で実施するプロジェクトを募集し、16件に対して助成を行いました。さらに、米国における小規模助成を41件(知的交流助成12件、草の根交流4件、日本理解促進25件)実施。さらに企画企画型助成の枠などで50件を助成しました。

②日米交流強化イニシアチブ

2007年11月の福田総理(当時)訪米の際に発表された「日米交流強化イニシアチブ」(知的交流、草の根交流および日本語教育の強化の3本柱)の一環として、米国の5つのシンクタンク(戦略国際問題研究所、アメリカン・エンタープライズ研究所、ブルッキングス研究所、外交問題評議会、ランド研究所)に対する助成のほか、米国の日米協会支援(7件)および在米日系人との交流強化事業を実施しています。

9——カルコン

日米文化教育交流会議(The United States - Japan Conference on Cultural and Educational Interchange: 略称CULCON: カルコン/米側事務局は日米友好基金:Japan-US Friendship Commission)は、2010年6月に、日米両国のカルコン委員がワシントンD.C.に会して「第24回合同会議」を開催しました。採択された共同声明において、広い意味での教育を通じた未来への投資を最重点施策として提唱しました。

[左] 国際シンポジウム「ソーシャルファームを中心とした日本と欧州の連携」報告書
[中] 「国際会議：女性のエンパワーメント」報告書
[右] JENESYS Programme 次世代リーダープログラム
「防災と人々のつながり：災害に強い社会の構築を目指して」報告書



民間からの資金協力

国際交流基金は、企業、団体、個人など広く民間からの資金協力を仰いで国際文化交流事業を実施しています。ここでは2010年度時点での国際交流基金への寄附制度を紹介するとともに、同制度を通じて資金のご協力をいただいた法人、個人の方々、およびそのご協力により支援を受けた事業を紹介します。

1. 寄附の種類

[1] 一般寄附金

当基金の国際文化交流事業の経費の財源として活用します。

ア. 一般寄附金制度

法人、個人から、寄附の時期、金額とも任意で受け入れる寄附金です。2010年度に寄附をした法人および個人、ならびに寄附による実施事業例は次頁の「事業費への寄附者」「民間出えん金寄附者」「民間出えん金による支援事業」を参照してください。

(ア) 事業費への寄附

寄附金を受け入れた年度の事業経費として活用します。寄附者の希望により、実施事業の中から、寄附金を充当する事業を指定することも可能です。

(イ) 基金(ファンド)への寄附(=民間出えん金)

寄附金を基金(ファンド)に組み入れ、その運用利息を毎年度の事業費として恒久的に活用します。

イ. 会員制度

年会費として企業、団体より一定額の寄附金を受け入れ、受け入れた年度の事業経費として活用します。1口10万円(年額)で、普通会员(1~4口)と特別会員(5口以上)があります。会員には、「国際交流基金年報」の送付等、各種特典を提供しています。2010年度の会員は次頁の「賛助会会員」を参照してください。

[2] 特定寄附金

国内の企業や個人が国内外の国際文化交流事業を支援する場合に、特定公益増進法人である国際交流基金が、その支援資金を寄附金として受け入れ、対象事業への助成金として交付する制度です。本制度を利用することで、企業や個人は寄附金に対する税制上の優遇措置を受けることができます。

対象となる事業は、国際文化交流を目的とする人物交流、海外における日本研究や日本語教育、国際文化交流を目的とする公演・展示・セミナー等の催し等です。また、特定寄附金の受け入れは、外部専門家で構成される審査委員会への諮問を経て決定します。2010年度の支援事業は次頁の「特定寄附金による支援事業」を参照してください。

2. 税制上の優遇措置

当基金は法人税法施行令第77条および所得税法施行令第217条により「公益の増進に著しく寄与する法人」(特定公益増進法人)に指定されており、上述の寄附は税制上の優遇措置の対象となります。

(1) 法人の場合

通常の寄附金とは別枠で、特定公益増進法人に対する寄附金の合計額と特別損金算入限度額とのいずれか少ない金額が損金に算入されます。寄附金の損金算入限度額は次の算式によります。

●通常の寄附金

$(\text{資本金等の額} \times \text{当期の月数} / 12 \times 2.5 / 1,000 + \text{所得の金額} \times 2.5 / 100) \times 1/2$

●特定公益増進法人に対する寄附金(特別損金算入限度額)

$(\text{資本金等の額} \times \text{当期の月数} / 12 \times 2.5 / 1,000 + \text{所得の金額} \times 5 / 100) \times 1/2$

(2) 個人の場合

所得の40%を上限として、寄附の合計金額から2千円を差し引いた金額が所得控除の対象となります。相続財産からの寄附についても、税制上の優遇措置があります。

3. 2010年度寄附金額実績

	件数	金額
一般寄附金	55件	20,966,000円
賛助会	45件	8,700,000円
事業費への寄附	7件	5,846,000円
民間出えん金	3件	6,420,000円
特定寄附金	49件	380,895,505円(注1)

(注1) うち、357,891,505円および2009年度より繰越した特定寄附金41,860,000円を、30事業(次頁「特定寄附金による支援事業」参照)に対する助成金として交付しました。残額(23,004,000円)は、6件の事業に対する助成金として2011年度に交付予定です。

(注2) なお、1972年の国際交流基金設立以来2010年度末までの累計で、一般寄附金として24億6,094万円、特定寄附金として657億942万円を受け入れています。

2010年度の寄附者や寄附金による事業一覧

賛助会会員(2010年度末現在、50音順、敬称略)

[1] 特別会員

松竹(株) / 電源開発(株) / (株)みずほ銀行 / (株)三菱東京UFJ銀行

[2] 普通会員

(財)あすか青年育成国際財団 / (財)池坊華道会 / 出光興産(株) / (株)印象社 / ウシオ電機(株) / (財)今日庵 / (財)NHKインターナショナル
カトーレック(株) / (株)関西アーバン銀行 / (株)紀伊國屋書店 / (株)講談社 / 講談社インターナショナル(株) / (財)講道館
(株)国際サービス・エージェンシー / (学)駒澤大学 / (株)桜映画社 / (株)資生堂 / (株)ジャパンエコー社 / (財)少林寺拳法連盟
スターレーン航空サービス(株) / (財)全日本剣道連盟 / (株)第一成和事務所 / ダイキン工業(株) / 大和証券キャピタル・マーケット(株) / (株)電通
東京ビジネスサービス(株) / 日興コーディアル証券(株) / (社)日本映画製作者連盟 / (株)日本折紙協会 / (財)日本国際協力センター / 野村證券(株)
パナソニック(株) / (株)美術出版サービスセンター / (株)日立製作所 / 富士ゼロックス(株) / (株)凡人社 / みずほ証券(株) / (株)三井住友銀行
三菱UFJモルガン・スタンレー証券(株) / (株)明治書院ホールディングス / 森ビル(株)

事業費への寄附者(敬称略、寄附受領順)

「第12回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展日本館展示」事業への寄附	大光電機(株) / 田島ルーフィング(株)
海外における日本語教育事業への寄附	土肥松男
事業全般への寄附	個人1名
「AGA-SHIO+ミュージック&リズムス」コンゴ民主共和国公演事業への寄附	ヤマハ発動機(株) 海外市場開拓事業部
パリ日本文化会館事業への寄附	(財)野村生涯教育センター
「日本ハンガリー教育フォーラム」日本語教育促進事業への寄附	住友化学(株)

民間出えん金寄附者(敬称略、寄附受領順)

三嘴博昭 / (財)国際文化交流推進協会 / 個人1名

民間出えん金による支援事業(寄附者の意向に基づき特別事業を設定し、事業名に寄附者の名を付する「冠寄附」の例)

冠寄附事業名	寄附者および事業内容
内田奨学金フェロシップ	寄附者は内田元亨氏(故人)。米国・欧州等の若手音楽家等を日本に招へいし、日本の著名な音楽関係者等と交流し、共演、共同制作に従事する機会を提供。2010年度は米国から1名のフェローを招へい
高砂熱学工業・日本研究フェロシップ	寄附者は高砂熱学工業株式会社。東南アジアの日本研究振興のために、同地域の若手日本研究者に訪日研究の機会を提供。2010年度はベトナムから1名のフェローを招へい
「渡辺健基金」図書寄贈	寄附者は渡辺行信氏(米国研修中に事故で逝去された元外務省職員渡辺健氏のご遺族)。中国天津社会科学院に日本研究のための図書を寄贈。2010年度は192冊の図書を寄贈

特定寄附金による支援事業()内は事業実施国

ロータリー国際親善奨学支援事業(米国、日本)	日韓学生パッケージデザイン交流プロジェクト(韓国、日本)
日米交流財団フェロシッププログラム(米国)	日中ジャーナリスト交流会議(中国、日本)
ウェスタンミシガン大学曾我道敏日本センター宛基金増資事業(米国)	国際犯罪学会第16回世界大会(日本)
「故石川吉右衛門教授記念・比較日本法基金」の設立(米国)	四天王寺ワッソ(日本)
コロンビア・ロー・スクール日米交流事業(米国)	日韓交流おまつり2010(日本)
コロンビア・ロー・スクール日本法研究奨学金(米国)	文化経済学会<日本>20周年記念事業(日本)
デューク・ロー・スクール日本法・文化プログラム(米国)	第17回ホノルルフェスティバル(米国)
日米研究インスティテュート(米国)	ミュージック・フロム・ジャパン創立35周年記念音楽祭(米国)
ミシガン大学ロー・スクール日本法研究プログラム(米国)	ミュージック・フロム・ジャパン2011年音楽祭(米国)
ミシガン大学ロー・スクール日本法研究プログラムのための基金設立事業(米国)	新国際版「マダム バタフライ」世界初演(イタリア)
エルエスエイチアジア奨学金(日本)	ヴァイオリンフェスタトウキョウ パリ公演(フランス)
ジャパン・リターン・プログラム2009年日本語サミット・ニッポン新発見塾(日本)	2010年トルコにおける日本年(トルコ)
ジャパン・リターン・プログラム2010年「勇気と平和」日本語サミット(日本)	日本音楽紹介ラジオ番組制作事業(中国)
ドイツ社団法人日本語普及センター日本語教育事業(ドイツ)	アジア女子大学(バンラデシュ)
和独大辞典(ドイツ)	日英博覧会日本庭園修復事業(英国)

財務諸表

決算報告書、貸借対照表、損益計算書、損失の処理に関する書類

決算報告書 [2010年4月1日～2011年3月31日]

[単位：円]

区分		予算額	決算額
収入	運営費交付金	12,850,693,000	12,850,693,000
	運用収入	1,303,743,000	1,854,523,715
	寄附金収入	863,810,000	395,441,505
	受託収入	824,046,000	643,991,692
	その他収入	1,026,126,000	816,048,019
計		16,868,418,000	16,560,697,931
支出	業務経費	14,353,529,000	13,128,014,551
	文化芸術交流事業費	2,300,551,000	2,275,350,060
	海外日本語事業費	4,527,663,000	4,262,693,286
	海外日本研究・知的交流事業費	2,601,925,000	2,354,708,876
	調査研究・情報提供等事業費	590,664,000	507,352,746
	その他事業費	4,332,726,000	3,727,909,583
	一般管理費	2,514,889,000	2,465,569,562
	人件費	1,728,620,000	1,680,269,845
	物件費	786,269,000	785,299,717
計		16,868,418,000	15,593,584,113

(注) 決算報告書においては国際交流基金の国内勤務役職員人件費は一括して一般管理費に計上しているが、損益計算書においては、国内勤務役職員の勤務実態に合わせて各業務分野毎の費用として計上している。

貸借対照表 [2011年3月31日]

[単位：円]

資産の部	I 流動資産	現金及び預金	10,150,081,416	
		有価証券	9,557,923,045	
		前払費用	22,538,938	
		未収収益	205,477,629	
		未収金	342,133,260	
		その他の流動資産	26,588,586	
		流動資産合計		20,304,742,874
II 固定資産	1 有形固定資産	建物	13,007,086,625	
		減価償却累計額	△ 3,739,210,134	9,267,876,491
		構築物	318,519,361	
		減価償却累計額	△ 169,708,742	148,810,619
		機械装置	9,134,105	
		減価償却累計額	△ 7,512,746	1,621,359
		車両運搬具	126,617,824	
		減価償却累計額	△ 94,996,786	31,621,038
		工具器具備品	1,162,170,262	
		減価償却累計額	△ 821,341,636	340,828,626
		美術品	462,170,874	
		土地	195,318,000	
		建設仮勘定	80,262,000	
		有形固定資産合計	10,528,509,007	
	2 無形固定資産	借地権	10,598,000	
		ソフトウェア	108,180,986	
		電話加入権	441,000	
		ソフトウェア仮勘定	26,893,125	
		無形固定資産合計	146,113,111	
	3 投資その他の資産	投資有価証券	46,112,120,508	
		長期預金	1,700,000,000	
		敷金保証金	786,432,760	
		投資その他の資産合計	48,598,553,268	
		固定資産合計		59,273,175,386
資産合計				79,577,918,260
負債の部	I 流動負債	運営費交付金債務	3,349,830,999	
		預り寄附金	34,064,154	
		未払金	1,272,191,136	
		未払費用	1,427,892	
		未払消費税	696,600	
		前受金	1,062,524,319	
		預り金	7,021,480	
		リース債務	13,126,008	
		引当金		
		賞与引当金	13,152,238	13,152,238
		流動負債合計		5,754,034,826
II 固定負債	資産見返負債	資産見返運営費交付金	982,575,500	
		資産見返寄附金	2,807,022	
		建設仮勘定見返運営費交付金	80,262,000	
		ソフトウェア仮勘定見返運営費交付金	26,893,125	1,092,537,647
		長期リース債務	11,372,040	
		資産除去債務	51,874,771	
		固定負債合計		1,155,784,458
負債合計				6,909,819,284
純資産の部	I 資本金	政府出資金	77,969,741,003	
		資本金合計		77,969,741,003
II 資本剰余金	資本剰余金	損益外減価償却累計額 (△)	△ 4,195,269,875	
		損益外減損損失累計額 (△)	△ 126,000	
		損益外利息費用累計額 (△)	△ 11,815,723	
		民間出えん金	906,922,787	
		資本剰余金合計		△ 2,882,950,827
III 繰越欠損金	当期未処理損失	(うち当期総損失)	△ 2,435,671,211	
		(うち当期総損失)	△ 1,054,425,082	
		繰越欠損金合計		△ 2,435,671,211
IV 評価・換算差額等	繰延ヘッジ損益		16,980,011	
		評価・換算差額合計		16,980,011
純資産合計				72,668,098,976
負債純資産合計				79,577,918,260

損益計算書 [2010年4月1日～2011年3月31日]

[単位：円]

経常費用	文化芸術交流事業費		2,528,187,982	
	日本語教育事業費		4,480,296,932	
	日本研究・知的交流事業費		2,565,294,402	
	調査研究・情報提供等事業費		589,738,156	
	その他事業費	在外事業費	3,470,069,722	
		文化交流施設等協力事業費	406,642,406	3,876,712,128
	一般管理費		1,406,394,697	
	財務費用		921,293	
	雑損		911,201,529	
経常費用合計				16,358,747,119
経常収益	運営費交付金収益		11,550,193,297	
	運用収益		1,681,057,004	
	受託収入		826,588,390	
	寄附金収益	寄附金収益	24,668,564	
		特定寄附金収益	399,751,505	424,420,069
	資産見返戻入	資産見返運営費交付金戻入	150,024,931	
		資産見返寄附金戻入	1,284,691	151,309,622
	財務収益	受取利息	1,407,979	1,407,979
	雑益	日本語能力試験受験料等収益	479,771,184	
		その他の雑益	189,268,405	669,039,589
経常収益合計				15,304,015,950
経常損失				1,054,731,169
臨時損失	固定資産除却損		4,663,201	4,663,201
臨時利益	資産見返運営費交付金戻入		4,816,271	
	固定資産売却益		153,017	4,969,288
当期純損失				1,054,425,082
当期総損失				1,054,425,082

損失の処理に関する書類 [2011年8月24日]

(単位：円)

I 当期未処理損失		2,435,671,211
当期総損失	1,054,425,082	
前期繰越欠損金	1,381,246,129	
II 次期繰越欠損金		2,435,671,211

諮問委員会等 [2010年度]

以下の方々に委員として、ご協力いただいています。(50音順・敬称略)

国際交流基金 評価に関する有識者委員会

片山 正夫

財団法人セゾン文化財団 常務理事

古城 佳子

東京大学大学院総合文化研究科 教授

曾田 修司

跡見学園女子大学マネジメント学部 教授

高階 秀爾

財団法人大原美術館 館長

天日 隆彦

読売新聞社 論説委員

西原 鈴子

前・東京女子大学現代文化学部 教授

堀江 正弘

政策研究大学院大学 教授

森元 峯夫

株式会社エスイー 代表取締役社長

日本研究米国諮問委員会 (American Advisory Committee) 2010—2011

学者・研究者

フェローシップ小委員会 (RF 小委員会)

Research Fellowship
Screening Subcommittee

Wesley Jacobsen

ハーバード大学 言語学

Susan Long

ジョン・キャロル大学 人類学

Kikuko Yamashita

ブラウン大学 日本語学/言語学

Anne Walthall

カリフォルニア大学アーバイン校 歴史学

Gennifer Weisenfeld

デューク大学 美術史

博士論文執筆者

フェローシップ小委員会 (DF 小委員会)

Doctoral Fellowship
Screening Subcommittee

Kent Calder

ジョンズ・ホプキンス大学 政治学

Rebecca Copeland

ワシントン大学 (セントルイス) 文学

James Dobbins

オーバーリン大学 宗教

Sabine Frühstück

カリフォルニア大学サンタバーバラ校 カルチュラルスタディー

Leonard Schoppa

バージニア大学 政治学

機関助成小委員会

(IPS 小委員会)

Institutional Project Support
Screening Subcommittee

Daniel Botsman

イエール大学 歴史学

Edward Lincoln

ニューヨーク大学 経済学

Jennifer Robertson

ミシガン大学 人類学

Richard Samuels

マサチューセッツ工科大学 政治学

Veronica Taylor

ワシントン大学 法学

パリ日本文化会館運営審議会

フランス側委員

Louis Schweitzer

ルノー社名誉会長
ル・モンド紙役員会議長

Paul Andreu

建築家

Jean-Louis Beffa

サンゴバン社会長

André Larquié

パリ・ベルシー・総合スポーツセンター理事長
シャトレ劇場理事長、国際芸術都市理事長

Jean Maheu

会計検査院顧問

Jacques Rigaud

フランス・メセナ協会元会長

André Ross

元駐日フランス大使

Christian Sautter

パリ市経済・財政・雇用担当助役、元経済財政工業大臣

Valérie Terranova

ジャック・シラク財団事務局長

日本側委員

福原 義春

株式会社社資生堂名誉会長

伊東 順二

美術評論家、富山大学芸術文化学部教授

荻野 アンナ

作家、慶應義塾大学文学部教授

酒井 忠康

世田谷美術館館長

佐々木 元

日本電気株式会社特別顧問

竹内 佐和子

京都大学工学研究科教授/日産科学振興財団
リーダーシッププログラムディレクター

西垣 通

東京大学大学院情報学環教授

芳賀 徹

岡崎市美術博物館館長、京都造形芸術大学名誉学長、
東京大学名誉教授

国際交流基金は21カ国に22の海外拠点を設けています。これらの拠点を足がかりに、世界各国の在外公館、文化交流機関や日本語教育機関等と緊密に連携をとりながら、グローバルに活動を展開しています。

① 韓国

ソウル日本文化センター
The Japan Foundation, Seoul
Vertigo Tower. 2&3F, Yonseiro 8-1,
Seodaemun-gu, Seoul 120-833, Korea
TEL : 82-2-397-2820
FAX : 82-2-397-2830

② 中国

北京日本文化センター
The Japan Foundation, Beijing
#301, 3F SK Tower, Beijing,
No.6 Jia Jianguomenwai Avenue,
Chaoyang District, Beijing, 100022, China
TEL : 86-10-8567-9511
FAX : 86-10-8567-9075

③ インドネシア

ジャカルタ日本文化センター
The Japan Foundation, Jakarta
Summitmas I, 2-3F, Jalan Jenderal Sudirman,
Kav. 61-62 Jakarta Selatan 12190, Indonesia
TEL : 62-21-520-1266
FAX : 62-21-525-1750

④ タイ

バンコク日本文化センター
The Japan Foundation, Bangkok
Serm-Mit Tower, 10F,
159 Sukhumvit 21 (Asoke Road),
Bangkok 10110, Thailand
TEL : 66-2-260-8560 ~ 64
FAX : 66-2-260-8565

⑤ フィリピン

マニラ日本文化センター
The Japan Foundation, Manila
12th Floor, Pacific Star Bldg.,
Sen. Gil J. Puyat Ave. Ext., cor.
Makati Ave., Makati, Metro
Manila 1226, The Philippines
TEL : 63-2-811-6155 ~ 8
FAX : 63-2-811-6153

⑥ マレーシア

クアラルンプール日本文化センター
The Japan Foundation, Kuala Lumpur
18th Floor, Northpoint Block B,
Mid-Valley City, No.1, Medan Syed Putra,
59200, Kuala Lumpur, Malaysia
TEL : 60-3-2284-6228
FAX : 60-3-2287-5859

⑦ インド

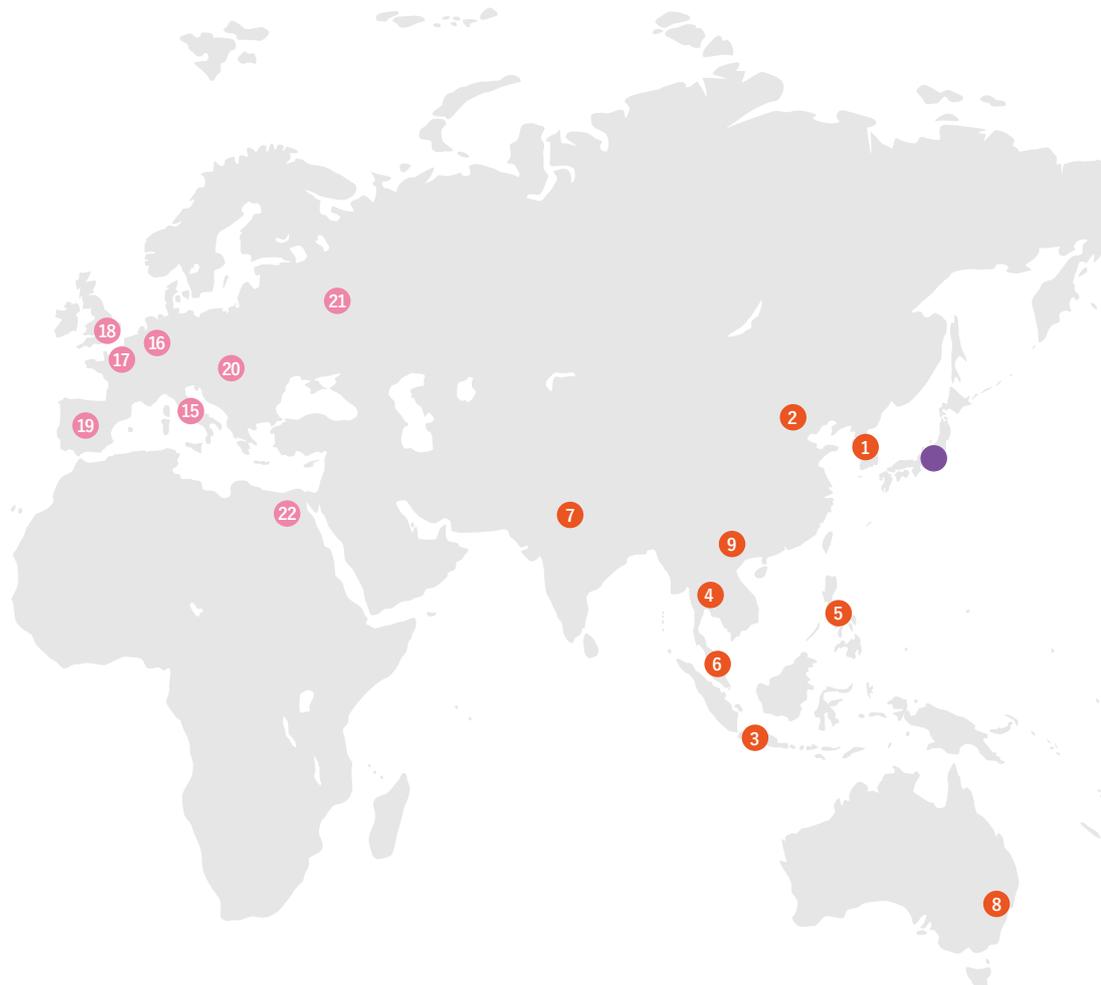
ニューデリー日本文化センター
The Japan Foundation, New Delhi
5-A, Ring Road, Lajpat Nagar-IV,
New Delhi 110024, India
TEL : 91-11-2644-2967/68
FAX : 91-11-2644-2969

⑧ オーストラリア

シドニー日本文化センター
The Japan Foundation, Sydney
Shop 23, Level 1, Chifley Plaza,
2 Chifley Square,
Sydney NSW 2000, Australia
TEL : 61-2-8239-0055
FAX : 61-2-9222-2168

⑨ ベトナム

ベトナム日本文化交流センター
The Japan Foundation Center for
Cultural Exchange in Vietnam
No.27 Quang Trung Street,
Hoan Kiem District, Hanoi, Vietnam
TEL : 84-4-3944-7419/20
FAX : 84-4-3944-7418



10 カナダ**トロント日本文化センター**

The Japan Foundation, Toronto
131 Bloor Street West, Suite 213,
Toronto, Ontario, M5S 1R1, Canada
Tel: 1-416-966-1600
Fax: 1-416-966-9773

米国**11 ニューヨーク日本文化センター**

The Japan Foundation, New York
152 West 57th Street, 17F
New York, NY 10019, U.S.A.
TEL : 1-212-489-0299
FAX : 1-212-489-0409

ニューヨーク日米センター

The Japan Foundation
Center for Global Partnership NY
152 West 57th Street, 17F
New York, NY 10019, U.S.A.
TEL : 1-212-489-1255
FAX : 1-212-489-1344

12 ロサンゼルス日本文化センター

The Japan Foundation, Los Angeles
333 South Grand Avenue, Suite 2250,
Los Angeles, CA 90071, U.S.A.
TEL : 1-213-621-2267
FAX : 1-213-621-2590

13 メキシコ**メキシコ日本文化センター**

The Japan Foundation, Mexico
Av. Ejército Nacional No. 418, 2do Piso,
Col. Chapultepec Morales, CP 11570,
Mexico, D.F., Mexico
TEL : 52-55-5254-8506
FAX : 52-55-5254-8521

14 ブラジル**サンパウロ日本文化センター**

The Japan Foundation, São Paulo
Avenida Paulista 37, 2° andar Paraíso,
CEP 01311-902, São Paulo, SP, Brasil
TEL : 55-11-3141-0843/0110
FAX : 55-11-3266-3562

15 イタリア**ローマ日本文化会館**

Istituto Giapponese di Cultura
(The Japan Foundation)
Via Antonio Gramsci 74, 00197 Roma, Italy
TEL : 39-06-322-4754/94
FAX : 39-06-322-2165

16 ドイツ**ケルン日本文化会館**

Japanisches Kulturinstitut
(The Japan Foundation)
Universitätsstraße 98, 50674 Köln, Germany
TEL : 49-221-9405580
FAX : 49-221-9405589

17 フランス**パリ日本文化会館**

Maison de la culture du Japon à Paris
(The Japan Foundation)
101 bis, quai Branly,
75740 Paris Cedex 15, France
TEL : 33-1-44-37-95-00
FAX : 33-1-44-37-95-15

18 英国**ロンドン日本文化センター**

The Japan Foundation, London
Russell Square House 6F, 10-12 Russell Square,
London, WC1B 5EH, United Kingdom
TEL : 44-20-7436-6695
FAX : 44-20-7323-4888

19 スペイン**マドリード日本文化センター**

The Japan Foundation, Madrid
Calle Almagro 5, 4a planta, 28010 Madrid, Spain
TEL : 34-91-310-1538
FAX : 34-91-308-7314

20 ハンガリー**ブダペスト日本文化センター**

The Japan Foundation, Budapest
Oktogon Ház 2F, 1062 Budapest,
Aradi u.8-10, Hungary
TEL : 36-1-214-0775/6
FAX : 36-1-214-0778

21 ロシア**全ロシア国立外国文献図書館「国際交流基金」文化事業部 (モスクワ日本文化センター)**

The Japanese Culture Department
"Japan Foundation" of the All-Russia State
Library for Foreign Literature
4th Floor, Nikoloyamskaya Street, 1, Moscow,
Russian Federation, 109189
TEL : 7-495-626-5583/85
FAX : 7-495-626-5568

22 エジプト**カイロ日本文化センター**

The Japan Foundation, Cairo
5th Floor, Cairo Center Building,
106 Kasr Al-Aini Street,
Garden City, Cairo, Arab Republic of Egypt
TEL : 20-2-2794-9431/9719
FAX : 20-2-2794-9085



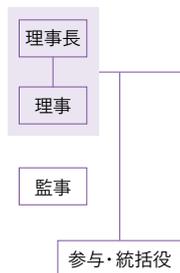
**国際交流基金
ジャパンファウンデーション
本部**

http://www.jpf.go.jp/
〒160-0004
東京都新宿区四谷4-4-1
■情報センター (JFIC)
TEL. 03-5369-6075
FAX. 03-5369-6044
■JFICライブラリー
TEL. 03-5369-6086
FAX. 03-5369-6048

日本語国際センター
http://www.jpf.go.jp/j/urawa/
〒330-0074
埼玉県さいたま市
浦和区北浦和5-6-36
■代表
TEL. 048-834-1180
FAX. 048-834-1170
■図書館
TEL. 048-834-1185
FAX. 048-830-1588

関西国際センター
http://www.jpf.go.jp/j/kansai/
〒598-0093
大阪府泉南郡田尻町
りんくうポート北3-14
■代表
TEL. 072-490-2600
FAX. 072-490-2800

京都支部
〒606-8436
京都市左京区粟田口鳥居町2番地の1
京都市国際交流会館3階
TEL. 075-762-1136
FAX. 075-762-1137



本部	総務部	総務課 人事課 企画・評価課 事業開発戦略室	システム管理室 情報公開室 調査室 給与・人事評価室
	経理部	財務課 会計課	財務監理室
	海外事業戦略部	海外拠点課 海外事業課	パリ日本文化会館業務室
文化事業グループ			
	文化事業部	企画調整チーム 生活文化チーム 造形美術チーム 舞台芸術チーム 映像・文芸チーム トリエンナーレチーム ポップカルチャーチーム	
	日中交流センター		
日本語事業グループ			
	日本語教育支援部	企画調整チーム JF講座チーム さくらネットワークチーム 派遣管理チーム 教師研修チーム (日本語国際センター)	
	日本語事業運営部	EPA研修チーム 事業化開発チーム (日本語国際センター) 教育事業チーム (関西国際センター) 試験運営チーム (日本語試験センター) 試験制作チーム (日本語試験センター)	
日本研究・知的交流事業グループ			
	日本研究・知的交流部	企画調整チーム 米州チーム アジア・大洋州チーム 欧州・中東・アフリカチーム	
	日米センター		
	情報センター (JFIC)		
	監査室		
附属機関	日本語国際センター 関西国際センター		
支部	京都支部		
海外拠点	<ul style="list-style-type: none"> ■ローマ日本文化会館 ■ケルン日本文化会館 ■パリ日本文化会館 ■ソウル日本文化センター ■北京日本文化センター ■ジャカルタ日本文化センター ■バンコク日本文化センター ■マニラ日本文化センター ■クアラルンプール日本文化センター ■ニューデリー日本文化センター ■シドニー日本文化センター ■トロント日本文化センター ■ニューヨーク日本文化センター ■ロサンゼルス日本文化センター ■メキシコ日本文化センター ■サンパウロ日本文化センター ■ロンドン日本文化センター ■マドリード日本文化センター ■ブダペスト日本文化センター ■全ロシア国立外国文献図書館 ■「国際交流基金」文化事業部 (モスクワ日本文化センター) ■カイロ日本文化センター ■ベトナム日本文化交流センター 		

国際交流基金のウェブサイト

ホームページ、メールマガジン

国際交流基金の事業紹介、イベント告知などの最新情報、公募プログラム申請情報、便利な日本語教材、過去に行った調査報告、海外拠点のウェブサイトへのリンクなど、国際交流基金を利用する方にとって役に立つ、さまざまな情報を国際交流基金ホームページ上で発信しています。

■国際交流基金ホームページ

→ <http://www.jpf.go.jp/>

■メールマガジンへの登録

→ [国際交流基金HP](#)→メールマガジン

ブログ、ツイッター

■ブログ「地球を、開けよう。」

→ <http://d.hatena.ne.jp/japanfoundation/>

■ツイッター

→ @japanfoundation

ウェブマガジン

■をちこち Magazine

→ <http://www.wochikochi.jp/>

分野別ウェブサイト

■日本のアーティスト・イン・レジデンス「AIR_J」

→ <http://www.air-j.info/>

■舞台芸術情報「Performing Arts Network Japan」

→ <http://performingarts.jp/>

■日本の出版物に関する書誌情報誌『Japanese Book News』(英語)

→ [国際交流基金HP](#)→刊行物・グッズのご案内→JF 定期刊行物

■日本語能力試験 (JLPT)

→ <http://www.jlpt.jp/>

■アニメ・マンガの日本語

→ <http://www.anime-manga.jp/>

■みんなの教材サイト

→ <http://minnanokyozai.jp/>

■日本語でケアナビ

→ <http://nihongodecarenavi.jp/>

■インターネット日本語しけん「すしテスト」

→ <http://momo.jpf.go.jp/sushi/>

■WEB版「エリンが挑戦! にほんごできます。」

→ <https://www.erin.ne.jp/>

表紙、扉に使用している写真について

国際交流基金の附属機関である、埼玉県さいたま市の日本語国際センターで撮影した写真です。この場所は、世界中から集まった日本語教師達が、共同生活を送りながら、長期の場合は1年に及ぶ期間、日本語教授法や日本文化について研修を受ける場所です。談話室、通路の床……なにげない空間のそこかしこに、日本で過ごした日々思い出が詰まっていることでしょう。 撮影：増田智泰



cover

談話室へと向かう階段



p.9

文化芸術交流
宿泊棟フリースペース通路



p.17

海外における日本語教育
宿泊棟洗濯室



p.25

日本研究・知的交流
ロビー



p.41

資料
宿泊棟階段

国際交流基金2010年度年報

2011年11月発行

編者・発行：国際交流基金 情報センター

〒160-0004 東京都新宿区四谷4-4-1

TEL.03-5369-6075 FAX.03-5369-6044

編集：ita&co [長谷川直子]

デザイン：岡本健+ [岡本健・阿部太一]

表紙・中扉写真撮影：増田智泰

印刷：東京印書館



地球環境に配慮した大豆油インキを使用しています



<http://www.jpff.go.jp/>